



大阪大学グローバル日本学教育研究拠点

Annual Report 2025

拠点長挨拶

宮本陽一

大阪大学理事・副学長



大阪大学は、人文学研究科日本学専攻をはじめ、人文・社会科学のあらゆる分野において、「日本」を対象とする研究者を全国有数の規模で擁しています。留学生教育の全国的拠点である日本語日本文化教育センターを擁している点も本学の重要な特長です。

グローバル日本学教育研究拠点は、そうした豊富なリソースを組織横断的に活用し、研究面では、「日本」を手がかりとして新たな学際的・国際的学術プラットフォームを構築することを、教育面では、あらゆる研究分野の学生に対し研究成果をわが国において社会実装しようとする際の基盤的な知見を提供することを目指しています。

2020年12月に設置された本拠点は、COVID-19パンデミックの影響を受けてきましたが、その制約の解けたいま、世界の拠点的日本研究機関を結ぶネットワークのハブとしての役割を一層強化していこうとしています。また、そのような国際的視野に立ちつつ、本学の「学際融合・社会連携を指向した双翼型大学院教育システム」(Double-Wing Academic Architecture: 通称DWAA) に基づく教育プログラムを展開することにより、学際性をそなえ社会連携を指向する新たな人材を「日本」という現場において育成しようとしています。

皆さまには、本拠点の取組にぜひご参加くださいますようお願い申し上げます。

Director's Message

MIYAMOTO Yoichi

Executive Vice President, the University of Osaka

Across all branches of the humanities and social sciences, Osaka University is home to a particularly eminent assortment of researchers engaged in the study of “Japan”, including those based at the Division of Japanese Studies at the Graduate School of Humanities. Another key feature of Osaka University is its Center for Japanese Language and Culture (CJLC), which stands at the heart of the national education of exchange students.

The Global Japanese Studies Education and Research Incubator (グローバル日本学教育研究拠点, GJS-ERI) is designed to take advantage of these rich institutional resources in ways that cut across organizational boundaries. In terms of research, GJS-ERI aims to serve as a new interdisciplinary and international platform for the study of “Japan”, and in terms of education, the Incubator strives to provide students from all fields with the knowledge necessary for the practical application of research results for the good of society.

GJS-ERI was founded in December 2020 amid the challenges raised by the COVID-19 pandemic. Now that the restrictions put in place due to the pandemic have been eased, the Incubator has redoubled its efforts to serve as a networking hub among institutions involved in research on Japan. At the same time, by continuing to develop and expand educational programs that incorporate both the Incubator's international outlook and Osaka University's Double-Wing Academic Architecture (DWAA) system, GJS-ERI is employing its unique setting in Japan to train new global talent with both interdisciplinary capabilities and an enduring interest in social engagement.

We warmly invite you to participate in our events and initiatives.

目次

- 1 拠点長挨拶
宮本陽一（大阪大学理事・副学長）
-
- 4 GJS-ERIとは
5 What Is GJS-ERI?
6 GJS-ERIの国際連携
10 GJS-ERIの高大連携・社会学連携

拠点形成プロジェクト

2022年度採択 拠点形成プロジェクト

- 12 東アジア世界における「モノの情報」研究拠点の形成：総合知による文化財分析の可能性
16 21世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築
18 オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究

2023年度採択 拠点形成プロジェクト

- 20 人文科学分野向け研究データ管理を促進するデジタル・ヒューマニティーズ学習教材開発

2024年度採択 拠点形成プロジェクト

- 22 明治期における伝統日本法紹介の試み——日独法学者による『令義解』独訳計画
24 キリシタン新出資料の多角的分析：ツールーズ断簡を中心に
26 三木学の国際拠点形成——哲学の人間学の可能性、人類学と協同主義の交錯と広がり

2025年度採択 拠点形成プロジェクト

- 28 Learning from and Promoting the African Association for Japanese Studies
30 デジタル人類学で拓く「デジタル日本学」教育のグローバル展開
32 東アジアへ拓かれた「戦後日本」の記憶の継承：地域間を結ぶ対話と歴史実践の拠点構築

-
- 34 コラム 次世代への〈Port of Call〉——未来への中継点としての特別資料の継承と活用
中村充孝（ハワイ大学マノア校図書館日本研究司書）

教育プログラム

- 36 大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」
38 大学院等高度副プログラム「デジタルヒューマニティーズ」
40 人文社会科学系オナー大学院プログラム「グローバル日本学ユニット」

国際シンポジウム

Globalizing Japanese Studies in the Age of the Rising Global South [開催報告]

- 43 プログラム
44 開催報告
宇野田尚哉（大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・副拠点長）
Japan-Africa Relations: New Horizons, Challenges, and the Role of the African Association for Japanese Studies
Adedoyin AGUORU (Professor, University of Ibadan)
45 中東における日本語教育：エジプトを中心に
エルハディディ・アブデルラフマーン（カイロ大学専任講師）
ブラジルの日本研究動向：サンパウロ大学を中心に
松原モラレス礼子（サンパウロ大学准教授）
46 国際シンポジウムを終えて
Facundo GARASINO (Specially Appointed Lecturer, the University of Osaka)
47 ご参加いただいた先生より
杉山欣也（金沢大学国際基幹教育院教授）

-
- 48 コラム Connecting Interdisciplinary Communities:
Teaching and Research of International Japanese Studies in Japan
Gloria Yu YANG (Lecturer, Kyushu University Faculty of Humanities)

月例ワークショップ

- 55 講演を終えて
岩本雄伍（大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻博士後期課程）

Graduate Conference

第7回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies

-
- 58 コラム サンパウロ大学 (USP) における集中講義と日本研究をめぐる学術交流
岸本恵実（大阪大学大学院人文学研究科教授）
-
- 60 今年の活動を振り返って
62 年間活動記録
63 構成員一覧
64 編集後記

GJS-ERIとは

グローバル日本学教育研究拠点 (Global Japanese Studies Education and Research Incubator, 略称GJS-ERI) は、人文・社会科学系の各部署でなされているディシプリン・ベースの取組の成果を踏まえつつ、教育研究の両面で次のような新たな展開を牽引していくことを目的として、2020年12月1日に設置されました。

まず、研究面では、「日本」を手がかりとして人文・社会科学の最先端の学問的対話が交わされる新たな学際的・国際的学術プラットフォームを構築することを目指しています。そのような新たな学術プラットフォームとして「グローバル日本学」を構築し、「日本」からグローバル・アカデミアに向けた研究発信力の強化を達成することが、本拠点の研究面での目的です。

つぎに、教育面では、そのような研究成果を学際的・社会学連携的な教育プログラムとして展開することを目指しています。日本の文化や社会についての幅広い知識は、理系を含むあらゆる分野の学生にとって、研究成果を社会実装しようとする際の基礎的素養として役立ちます。研究成果を社会実装するための基礎学として「日本学」を位置づける立場から、学際的・社会学連携的な教育プログラムを展開し、「日本」発の独創性をそなえたグローバル人材を育成することが、本拠点の教育面での目的です。

さらに、以上のような新生面を拓くための基盤として、本学で積極的に取り組まれている大量のデータに基礎づけられたデータ駆動型の教育研究に、人文・社会科学系の領域において「日本」研究の立場から注力しようとしています。

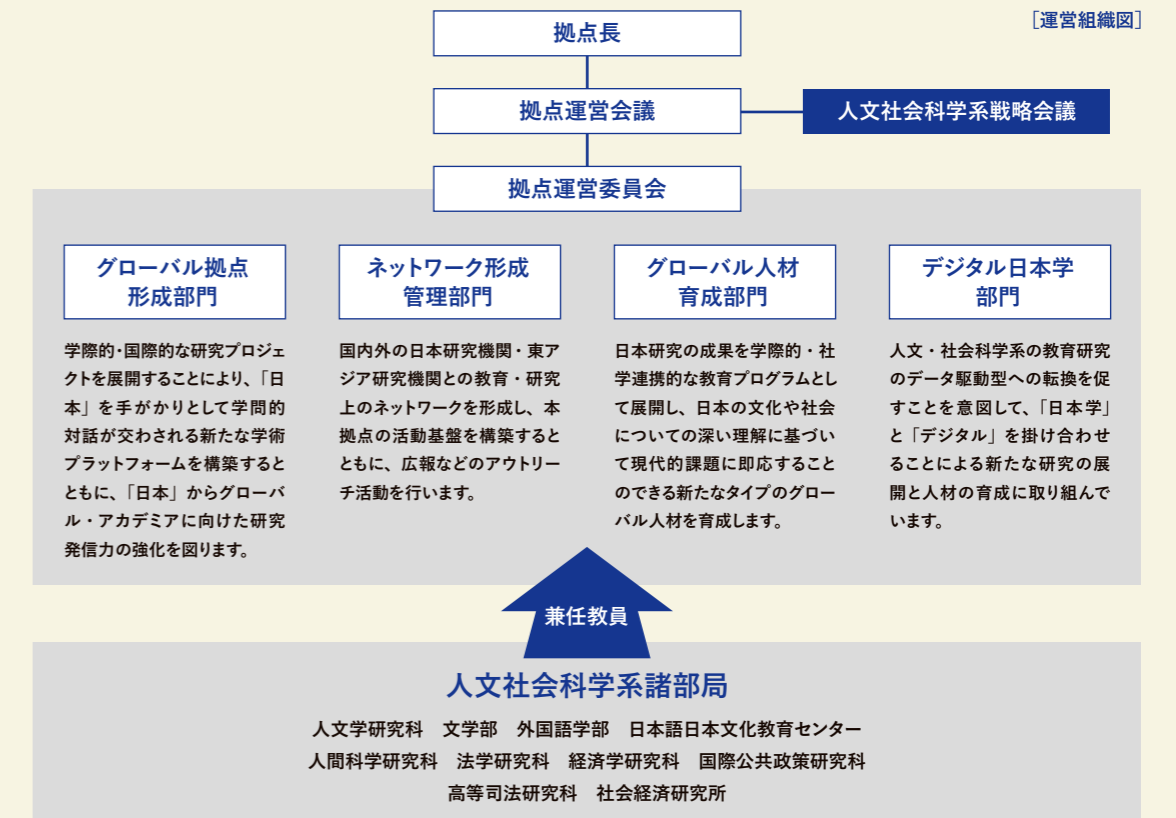


What Is GJS-ERI?

The Global Japanese Studies Education and Research Incubator (GJS-ERI), established at Osaka University on December 1, 2020, aims to generate new advances in research and education on Japan by integrating the benefits of work done in both the humanities and social science disciplines, actively adopting data-driven approaches to make the most of the rich assortment of materials accessible at the university.

In terms of research, GJS-ERI serves as an international and interdisciplinary platform for the exchange of advanced academic dialogue relating to the study of Japan. The research efforts of the Incubator are geared towards creating an environment conducive to the development of Global Japanese Studies and to the effective dissemination of research results from Japan to the global academic community.

Further, GJS-ERI endeavors to translate its research results into valuable interdisciplinary and society-oriented educational programs. For students in all fields, including the natural sciences, a broad understanding of culture and society is useful when considering the practical applications of research results. Therefore, the Incubator aims to create educational programs that incorporate the study of Japan as part of an essential foundation for the training of global talent.



GJS-ERIの国際連携

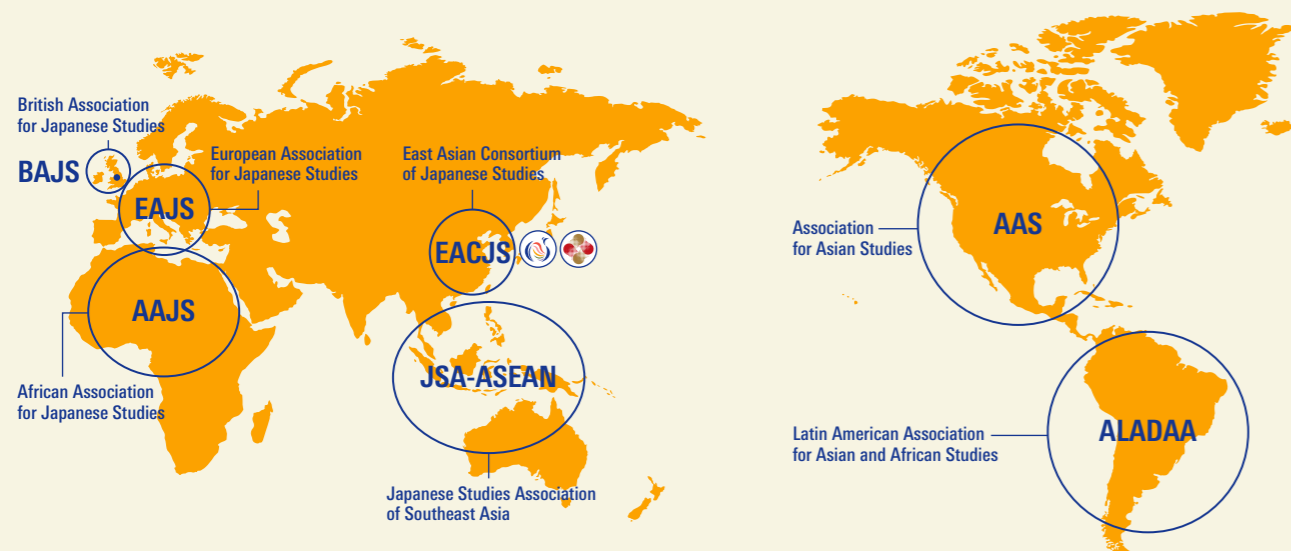
概要

大阪大学は、人文学研究科日本学専攻、日本語日本文化教育センターをはじめ、各部局に、全国有数の規模で、日本に関する教育・研究を行っている研究者を擁しています。この人的リソースを部局横断的に組織化し、より高度な教育・研究を学際的・国際的・社学連携的に展開することにより、日本に関する教育・研究の拠点化を図ることは、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点の目的です。なかでも、国際的な教育研究ネットワークの構築と拠点形成が本拠点の重要な役割です。

世界における日本研究と本拠点の位置づけ

当然のことながら、日本研究は、日本においてのみ行われているわけではありません。世界には、日本研究、あるいは日本研究を含むアジア研究を主題とする国際的な学会が、地域ごとに存在しています。日本研究の博士後期課程を擁する拠点的な教育研究機関は、北米・(英国を含む)西欧・オーストラリア・東アジアに多数あります。北米・(英国を含む)西欧などでの日本研究の国際的対話は英語を基本としており、東アジアでの日本研究の国際的対話は日本語ベースで行われることが一般的です。

本拠点がグローバルな教育研究拠点としての使命を達成するため、このような国際的学術環境のなかで緊密なネットワークを構築し、そのハブとなりプレゼンスを発揮することが求められています。本拠点ではこれまで、東アジア、北米やヨーロッパにおける国際的な教育や研究の主要な拠点となっている大学の部局や研究センターと学術交流協定を締結してきました。そこで、2025年には、アフリカ、中東やラテンアメリカの主要な日本研究機関とのネットワーク構築に注力しました。



各地のアジア研究・日本研究の主要な国際学会

国際的ネットワーク構築に向けた今年の取り組み

本拠点では、すでに述べた国際的学術環境のなかでプレゼンスを発揮するために、年1回の国際シンポジウムや月1回のワークショップの開催、国際的共同研究の公募・採択・支援、国際的研究発信力を高めるための教育プログラムの運営などの事業を行っています。下の地図では、これらの活動を通して構築しつつある国際的ネットワークを視覚化しています。

本拠点の国際連携は、アジア研究や日本研究の国際的学術組織がすでに確立している地域、すなわち、北米、ヨーロッパ、東アジアなどに所在する諸機関との関係を中心に進められてきました。そのうえで、教育と研究をめぐる本拠点のグローバルなネットワークを新たな方向へ発展させるべく、今年はアフリカ、中東やラテンアメリカにおける日本研究の国際的な拠点とのネットワーク構築にとりわけ尽力しました。さらに、引き続き北米、ヨーロッパと東アジアにおける日本研究の国際的な機関との連携強化を図りました。



アフリカ、中東やラテンアメリカでは、修士課程までしか教育プログラムがない機関も多いですが、これらの地域において近い将来にアジア研究・日本研究が全面的に展開されることが期待されています。このような地域とのネットワーク構築と連携強化も、本拠点の重要な課題です。そこで、アフリカ日本学会（African Association for Japanese Studies）との連携強化を図る拠点形成プロジェクト「Learning from and Promoting the African Association for Japanese Studies」（代表者：ガデミアミン、人文学研究科准教授）を新規に採択しました。このプロジェクトの目的と概要に関しては、本レポートに掲載してある報告をご参照ください（28-29ページ）。この拠点形成プロジェクトと本拠点の共催で、12月13日（土）に「Globalizing Japanese Studies in the Age of the Rising Global South」という国際シンポジウムを大阪大学箕面キャンパスで開催しました。ナイジェリア、エジプトとブラジルにおける中核的な日本研究組織や機関からの登壇者を招き、それぞれの地域における日本研究の現状、関心の所在や展望についてご報告いただきました。これを通して、各地域における研究や教育の背景、特徴や課題について相互の理解を深め、連携するきっかけを創り出すことを目指しました（詳細に関しては本レポートの42-45ページを参照）。2026年以降も、この機会に得た問題意識、具体的な課題やつながりをより継続的・体系的に発展させるべく、拠点形成プロジェクトの活動や国際学術イベントの開催に力を入れて、グローバル・サウスとのネットワーク構築の基盤を固める考えです。

そのような中で、本拠点によるグローバル・サウスとの連携は、ラテンアメリカ地域から具体化しつつあることを特筆しておきたいと思います。2024年の活動を引き継ぐ形で、ラテンアメリカやスペイン語圏でアジア研究・日本研究の教育や学術活動において中心的な役割を果たしてきたメキシコ大学院大学アジア・アフリカ研究センターと部局間学術交流協定を締結しました。7月9日には、同センターのホセ・アントニオ・セルベールセンター長が、大阪大学吹田キャンパスを訪問し、本拠点の拠点長などと今後の具体的な教育研究上の連携強化について展望を共有したのち、学術交流協定への署名を行いました。今回の協定締結は、2024年12月19日に同センターのマティアス・チアッペ教授が大学院生とともに来訪した時に行った月例ワークショップの延長に実現しました（『アニュアル・レポート2024』47-49ページ、54ページを参照）。また、本拠点兼任教員の岸本恵実教授（人文学研究科）が8月から9月にかけてブラジルに滞在し、サンパウロ大学哲学・文学・人間科学部東洋文学科で集中講義をしました。さらに、岸本教授とファクンド・ガラシーノ本拠点特任講師が9月10日から12日にかけてマナウス市のアマゾナス連邦大学で開催された第15回ブラジル日本研究国際学会に参加し、研究報告を行いました。そして9月13日に同市で開催された「日本留学フェア in 西部アマゾン日伯協会」に参加して、大阪大学を紹介しました（56-57ページを参照）。2026年においても、日本研究に関するラテンアメリカの主要な機関との教育・研究活動をさらに充実・拡大させることによって、グローバル・サウスにおける本拠点の存在感を高めていく所存です。



国際シンポジウム
「Globalizing Japanese Studies in the Age of the Rising Global South」
(2025年12月13日) 討論の様子



月例ワークショップ7月例会
「Socialization in the Transitions」
報告の様子

一方、東アジアの教育研究機関との連携においては、東アジア日本研究者協議会へのかかわりを軸に展開しました。同協議会は、東アジアを拠点とする多様な分野の日本研究者に国際的な研究発表、議論と交流の場を提供することを目的としています。そこで今年も、10月31日から11月2日にかけて韓国・翰林大学（江原特別自治道春川市）で開かれた第9回国際学術大会の運営委員会に拠点として出席しました。台湾、韓国、中国や日本の大学や研究機関等の参加者とともに東アジアにおける日本研究の現状と展望について議論をしながら、同地域でのネットワーク強化を図りました。

また、ハワイ大学マノア校を中心に、今年も引き続き北米地域との連携強化に努めました。2024年7月開催の月例ワークショップにご登壇いただいたAndre Haag助教授とのご縁を活かし、2月中旬に副拠点長の宇野田尚哉教授らがハワイ大学マノア校を訪問して、東アジア言語文学科の関係者と今後の部局間協定の可能性や連携の具体的な方針について話し合いました。その後、7月には、同学科の博士課程に在籍しながら本学人文学研究科の招へい研究員でもあるJoseph Iseri氏を迎えて月例ワークショップを開催しました。そして9月の月例ワークショップでは、ハワイ大学講師のBrandon Marc Takashi Higa氏にご登壇いただきました（詳細に関しては本レポートの51-52ページを参照）。このような具体的な研究交流を基盤として、今後ともハワイ大学をはじめ北米の主要な拠点とのネットワーク構築を強化していく所存です。

なお、ヨーロッパとの連携にも引き続き携わっています。2025年7月15日にナポリ東洋大学と部局間学術交流協定を締結しました。さらに、7月23日にはワルシャワ大学東洋学部のスタレツカ・カタジナ准教授が来訪されました。その際、中欧におけるアジア研究・日本研究の拠点的機関である同学部についてご紹介いただくとともに、本拠点との教育研究上の連携強化について意見交換を行い、引き続きさまざまな可能性を探ることとなりました。

今後の展望

グローバル・サウスとも称されるアフリカ、中東やラテンアメリカなどでは、諸地域間の格差や不均衡という問題を含みながらも、全体的に見れば今もなお大学進学率が増加しています。また、アジア研究・日本研究をめぐる教育・研究機関の現状も極めて多様でありながらも、これから日本語や日本文化の学習者と研究者が増えていく大きな可能性を秘めているという点において、共通していると言えます。本拠点では、このような可能性を確実なものにするため、今後ともグローバル・サウスの主要な機関や組織とのネットワーク構築にとりわけ尽力していきます。そのための具体的な方法として、2026年にはラテンアメリカと東南アジアの大学と共同での国際シンポジウムの開催を検討しています。今後とも本拠点の国際連携にご理解とご協力をいただければ幸いです。

GJS-ERIの高大連携・社会学連携

近年、大学に期待される学術研究や人材育成のあり方が、大きく変わりつつあります。人文学においては、歴史、社会や文化などに関する最先端の専門知を生み出すだけでなく、研究成果をいかに社会実装するかが問われています。さらに教育面においては、高度な専門知を身につけているだけでなく、それを活かして社会において新たな価値を創造することのできる人材の育成が、強く求められているのです。「日本」に関わる教育・研究の領域において全国有数の人的リソースを擁する大阪大学では、本拠点が人文・社会科学系の部局を横断するかたちで、高大連携や社会学連携に努めています。

高大連携事業

「高校生のための大阪大学人文・社会科学系講義」

本学の人文・社会科学系の研究成果を日本社会、とりわけ次世代を担う若い人々に向けて還元すべく、2025年9月13日(土)に、「高校生のための大阪大学人文・社会科学系講義」を大阪大学中之島センターで開講しました。第1回の開催となった今回の講座では、大阪大学の知的背景である懐徳堂と適塾について知っていただきつつ、言語学の最先端の研究成果に触れていただきました。当日は、高校生とその家族等28名にご参加いただきました。

日時：2025年9月13日[土] 12:00-16:00

会場：大阪大学中之島センターセミナー室7B

プログラム

司会=岩井茂樹(大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・副拠点長)

講演① 「懐徳堂と適塾：大阪大学の知的背景」
宇野田尚哉(大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・副拠点長)

講演② 「日本語が話せるということ」
宮本陽一(大阪大学理事・副学長/大阪大学グローバル日本学教育研究拠点長)

見学会 懐徳堂旧趾碑・適塾
野村玄(大阪大学大学院人文学研究科教授/大阪大学適塾記念センター兼任教員)



GJS Research Workshop 2025年10月例会

アントレプレナーシップと人文知(ラウンドテーブル・セッション)

大学教育、とりわけ大学院に期待されている人材育成をめぐる最新の動向に答えるべく、大阪大学ではさまざまな取り組みがなされています。そのなかで2018年に設立された共創機構は、大阪大学の技術や研究シーズと産業界のニーズを結びつけ、社会課題解決と新規事業創出を目指す産学連携の中核組織として、学内外をつなぐ重要な役割を果たしてきました。また、キャリアセンターでは、キャリア教育と実践的な就職支援を融合させながら、学生各々の独自性を重視したキャリアデザインの支援に取り組んでいます。さらに人文学研究科でも、大学院修了後に学生が人文学の知見を実社会に活用する力を育成することを目的としてインターンシップ科目を提供しています。

このような状況のなかで本拠点では、主に人文学系のオーディエンスを念頭に、これらの部局での取り組みを紹介するとともに、それらを横断的につなぐ試みとして、10月21日(火)にラウンドテーブル・セッションを企画しました。このセッションのきっかけとなったのは、EO Osaka (Entrepreneurs' Organization—起業家機構)で活躍する本学OB鳥居大嗣さんからの働きかけです。学生起業家支援にも取り組んでいるEO Osakaの観点からの話題提供・問題提起を起点として、ラウンドテーブル形式で議論をしました。今大学に求められる人材育成のあり方、とりわけ人文学との関係について、活発な意見交換が行われる貴重な機会となりました。今後とも、人文学・社会科学や日本研究独自の知見を活かしながら、大学内の研究者や学生と外の地域、社会や企業をつなぐような事業を一層充実させていく所存です。

東アジア世界における「モノ的情報」研究拠点の形成： 総合知による文化財分析の可能性

Designing a Comprehensive Framework for Analyzing the Materiality of East Asian Cultural Heritage Objects

プロジェクト概要

今日、東・東南アジア地域においては、伝統的なものづくりの技術が消滅しつつあるだけでなく、モノや道具の使用法や製造法に関する人びとの記憶や情報が失われつつある。そうしたなかで、過去の人類がどのような道具を使用し、どのような製品を生産してきたか、またどのように道具や製品を使用しなくなり、廃棄してきたかを知るためには、最先端の科学的な分析技術なども用いながら、「モノ」そのものや、その生産、流通、消費をとりまいているコンテキストについて、改めて考え直す必要がある。

これまで歴史学や人類学では、「モノ」やその生産、流通、消費を、局所的なコンテキストに即して解釈することが多かった。そうしたなか、コンテキストを地理的に拡張し、「モノ」の生産、流通、消費を地球規模でとらえようとするグローバルヒストリーの視点に加え、認識論的なコンテキストの外側にある「モノ」と人との存在論的な関係を問い直すことが求められるようになってきた。

このような問い直しの過程で、本プロジェクトが目指したのがイメージング分光分析である。イメージング分光分析は、視覚や触覚について、多くの人にとって識別できないレベルまで分析することのできる技術である。この分析手法を用いれば、過去に地球上で生産され、流通し、消費された貴重な文化財としての生活や生産の道具や工芸品、工業品のうちのすべてではないにしても、かなりの部分を破壊することなく、客観的な指標を用いて同定し、比較することが可能となる。

しかし、イメージング分光分析の利点はこれだけにとどまらない。人間の目に光として感じられる波長範囲は360-400nmから760-830nmとされ幅を持っている。地球上の有機体は、たとえば蝙蝠や蛇は830nmを越えた波長を感知することができる。昆虫や鳥は360nm以下の波長を感知することができる。地球上に存在する物質は人工物も含めて、多様な見え方をしており、その見え方に即して有機体は行動をしたり、反応したりしているのである。イメージング分光分析を用いて「モノ」を見ることは「モノ」そのものや、その生産、流通、消費をとりまいているコンテキストを、人にとって意味あるコンテキストから、他の有機体にとって意味あるコンテキストに開放することを意味している。

このことは、具体的な分析史料やサンプルを開放されたコンテキストにおいて把握するということに加えて、アナログカルな意味も大きい。イメージング分光分析が対象とできるのは、人の感覚という点で言えば、視覚と触覚に関わる部分であり、聴覚や嗅覚については埒外である。また質量数の高い元素の分析に向くが、有機物の分析に向かないなどの特性もある。万能というわけにはいかないが、それでもイメージング分光分析が暗示するように、ある人の五感では感知できないが、他の人や有機体には感知できるものがあるという前提に立つことは、人とモノとの関わり合い方を再考するための有効な戦略となり得る。そうした観点と分析技術によって、「モノ」そのものや、その生産、流通、消費を地球規模でとらえ、東・東南アジア地域の生存基盤の変容に関する研究に新たなダイメンションを加えようというのが本プロジェクトの狙いである。

最終年度の実績

人とモノとの関わり合い方に関して、イメージング分光分析がアナロジーとして持つ意味を踏まえつつ、東・東南アジアにおける「モノ」そのものや、その生産、流通、消費を地球規模でとらえるため、2024年度は、セブ島で出土した陶磁器の非破壊分析を行うとともに、九谷焼や浮世絵を試料とするイメージング分光分析を行った。セブ島での調査は、磁器や塗料の流通と消費を明らかにするための分析であり、九谷焼と浮世絵の分析は、釉薬や顔料の生産や流通、消費を地球規模で把握し、比較するための基準となる「教師データ」の収集を目的としたものである。なお、2024年の『アニュアル・レポート』では2024年1月から12月にかけての研究実績についてすでに詳述しているため、以下ではその時に言及できなかったものや2025年1月から3月にかけての実績について報告する。

(1) 対馬調査

2024年9月と2025年2月に対馬市峰町歴史民俗資料館を訪問し、木坂海人神社所蔵などの文化財を熟覧した。とりわけ佐賀小姓島遺跡の石棺から発見されたガラス玉の保存状態がよく、分光分析に馴染むことから、今後、詳しい調査を実施することとした。

(2) 井上耕一コレクションの調査

2025年2月に故・井上耕一氏が東南アジアで収集した漆器類について、南山大学人類学博物館とともに熟覧し、分光分析の可能性を探った。

研究期間全体における研究成果の概要

本プロジェクトでは、意味論的な次元と技術論的な次元の融合によって、新たな物質文化研究の地平を見出すことをめざした。

【分析対象】

プロジェクトの第1段階では、どのような物質（もの）に着目することで、最先端の分析技術によって新たな「モノ的情報」を抽出し得るかという点について、特に日本列島と東アジア、東南アジアとの間で流通、あるいは製作技術の移転がみられた道具や工芸品を対象に検討した。

(1) 安平壺の製造・流通・消費

台湾・台南において現地調査を実施し、安平壺の製造・流通・消費に関して、特に福建省から台湾にコンテナーとして輸送されてきて以降の二次利用、二次消費に未だ十分に解明されていない研究課題が存在していることが判明した。二次利用、二次消費では、祖先祭祀に関係する利用などもあり、無地の安平壺に彩色や文字が描かれることがあり、経年劣化で薄れた画像をイメージング分光分析で再現可能であることも明らかになった。

(2) 大工道具などの分析

土佐などの国内の産地と、台湾を含め内外の消費地の大工道具を分析することで、明治期以降の大工道具、および生産技術の流通について、本年度は、四国地方及び台湾での現地調査により、周防大島に関連する民具がどう使われなくなり、とって置かれ、捨てられ（そうになっ）たのかを、人やモノの移動や、その背後にある社会関係と関連づけながらたどった。従来の民具学のコンテキストでは、周防大島を構成する下記に列挙する地区がそれぞれ道具収集と保存の単位とされてきた。しかし、道具の複合的な意味は、そうした隣接性のコンテキストに加えて、類似性のコンテキストにおいても評価されなければならない。この点に関して、周防大島を起点に、四国、九州、本州、台湾、朝鮮半島、満洲の間で道具と技術、意匠に関する相互作用が生じていたのではないかとの仮説が得られた。

(3) フィリピン・セブ島における文化財分析

セブ島において中国や日本から輸入されたと考えられている磁器や、教会の天井、壁面装飾、収蔵絵画の分光デー

タを収集した。日本国内の肥前や景德鎮と比較することで、客観的な数値に基づく産地特定の可能性が開かれるとともに、これまで印象的な判断に基づいていた肥前と景德鎮の色味や風合いの違いについても、分光学的な裏付けを得る可能性が出てきた。また教会の天井、壁面装飾、収蔵絵画については、現時点では予備的な検討を行ったに過ぎないが、文献資料とつき合わせることで、天井、壁面装飾、収蔵絵画において特定の色が選択される条件に関する分析や、東・東南アジアの塗料や絵の具の流通に関して新たな知見が得られる可能性が確認できた。

- a) 輸入肥前磁器（フィリピン国立博物館セブ分館）
- b) 輸入肥前磁器（ボルホオン教会）
- c) 天井及び壁面装飾（ボルホオン教会）
- d) 収蔵絵画（アルガオ教会）
- e) 輸入肥前磁器及び景德鎮など中国磁器（Museo Parian de Sugbo）

これらの分析に加え、新たに文字の描かれた磁器のサンプルについても一次的なデータを収集した。

(4) 九谷焼の断面分析

石川県工業試験場九谷焼技術センターとの共同研究において、センターから提供された上絵が剥離した九谷焼サンプルの釉薬の状態を調査するために、OCT（Optical Coherence Tomography: 光干渉断層撮影）法による陶磁器表面の分析を行った。OCTは物体内部の構造を非破壊で見る技術であり、文化財の分析への応用が期待されている。

(5) 浮世絵に使用された顔料の調査

イメージング分光技術を利用し、浮世絵の染料分析を行った。染料の基本分析データと比較を行い、浮世絵に使用されている染料について考察を行った。

(6) ガラス玉

対馬・佐賀小姓島遺跡の石棺から発見されたガラス玉を熟覧し、分光分析に馴染むことを確認した。

(7) 藍胎・馬毛胎漆器

井上耕一氏コレクション（現・南山大学人類学博物館所蔵）のキンマ入れや托鉢などのビルマ産藍胎・馬毛胎漆器を熟覧し、OCT分析に馴染むことを確認した。

(8) 産業遺産

陶磁器顔料・釉薬分析の可能性を探る過程で、瀬戸や常滑、砥部、九谷などの国内主要産地、及び鶯歌・新竹などの台湾での陶磁器生産地において、衛生陶器、碇子、ガラ

スなどの産業用の陶磁器やガラス製品の生産技術に関わる技術交流に関する新たな研究課題が見えてきた。これらの産業用陶磁器、ガラス素材は、東アジアの近代化はもとより、今日の半導体産業の礎ともなるものであり、日本と台湾、朝鮮半島、満洲などにおける製造、流通、消費を調査することで東アジア近代史に関する新たな知見が得られる可能性がある。

【問題系の整理】

上記の検討に即して、モノの情報に関する問題系を整理すると次のようになる。

(1) 産地の特定と流通経路

伝世品はもちろんのこと、各地で発掘された道具や工芸品の製作地は、ほとんどの場合、すでに特定されており、製作地の特定に新規性はないものの、流通と製作技術の移転に関しては、なお以下の研究課題が残されている。

- a) 産地が特定された資料の多くは、完全なかたちで残っている資料である。断片や破片、残骸は、数も多く、これまでの技術で産地の特定に至っていない。産地が特定されている道具や工芸品を教師データとして、特に発掘された断片や破片、残骸の産地を特定することは、道具や工芸品の実際の流通量を推測するうえでも、またなぜ特定の道具や工芸品が完全なかたちを止め、他の資料がそうでないのかを考えるうえでも、新たな知見を提供し得る。
- b) 発掘された道具や工芸品の原料について、分光分析は情報を提供し得る。それによって、稀少な顔料や染料の流通経路について示唆を得ることができる。

(2) 製作技術の記録

大工道具やキンマ入れなどの民具に関しては、伝世品、発掘品ともに、OCT分析などを他の記録手法と併用することで、いわゆる職人技とされる製作技術を含めて数値的に記録することができる。そうすることで、特定の技術が翻案されながら、地域間を移動した様子について考察する材料を得ることができる。伝承以外の方法で技術を記録することは、すでに廃れた製作技術や衰退しつつある技術を後世に残す意味でも重要であり、本プロジェクトで着目した手法をその一部とする製作技術を記録する手法の開発が必要である。

(3) 文化財と民具

本プロジェクトを実施する過程で、いわゆる民具と文化財の区別や保存に関して、問題系が存在していることが明らかになってきた。

文化財保護法では、文化財を「我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの」と定義している。一方、同法は「民俗文化財」を「衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習、民俗芸能、民俗技術及びこれらに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件で我が国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの」と規定している。民俗文化財の保存のあり方を考えるうえでは、文化財の定義にある国民統合と不可分な価値観と、民俗文化財の規定に垣間見られる社会史的な価値観の間どのような齟齬があり、それがどのような政治的含意を持つのかについて、政策レベルのみならず、「古いものをとっておく、あるいは廃棄する」といった人とモノとの関係性にも配慮しながら検討する必要がある。

(4) モノの社会的意味と技術的意味

本プロジェクトでは、対象となる資料をどのような用語で用言すべきか、常に逡巡してきた。「道具」「民具」「工芸品」「文化財」といった特定の呼称で表現されるモノは、行為主体間の社会的な相互行為のなかで、すでに社会的意味と分かち難く結びついているからである。

人間の目に光として感じられる波長範囲は360-400nmから760-830nmとされ幅を持っている。地球上の有機体は、たとえば蝙蝠や蛇は830nmを越えた波長を感知することができ、昆虫や鳥は360nm以下の波長を感知することができる。地球上に存在する物質は人工物も含めて、多様な見え方をしており、その見え方に即して有機体は行動をしたり、反応したりする。イメージング分光分析を用いて「モノ」を見ることは「モノ」そのものや、その生産、流通、消費をとりまわっているコンテキストを、人にとって意味あるコ



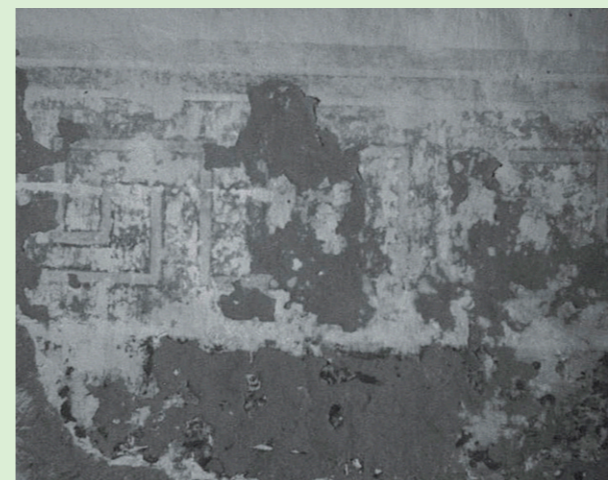
フィリピン国立博物館（セブ分館）での分析風景

ンテキストから、他の有機体にとって意味あるコンテキストに開放することを意味している。

イメージング分光分析が暗示する、人にとって不可知の領域の存在は、人とモノとの関わり合い方を再考するうえで示唆的である。

研究成果

本プロジェクト全体を通しての発表論文や報告の詳細について、ウェブサイトをご参照ください。



ボルホオン教会の壁面装飾（透過限界波長880nm）の画像



文字の入った磁器（360nm）の画像。人が感知できる限界の波長。

プロジェクト代表者

宮原 暁（大阪大学大学院人文学研究科教授）

プロジェクト構成員（学内）

清水政明（大阪大学大学院人文学研究科教授）

猿倉信彦（大阪大学レーザー科学研究所教授）

清水俊彦（大阪大学レーザー科学研究所准教授）

筑本知子（大阪大学レーザー科学研究所教授）

島藺洋介（大阪大学グローバルイニシアティブ機構講師）

敖 夢玲（大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員）

高木泰伸（大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員）

プロジェクト構成員（学外）

野上建紀（長崎大学多文化社会学部教授）

吉田英樹（長崎県産業技術センター 陶磁器科科长）

中野雄二（波佐見町歴史文化交流館学芸員／波佐見町教育委員会文化財班課長補佐）

岡野翔太（神戸大学大学院人文学研究科助教）

BERSALES, Jose Eleazar R.（フィリピン・サンカルロス大学人類学科教授）

栗 建安（福建省博物院元研究員 [定年退職]）

JIMENEZ VERDEJO, Juan Ramon（滋賀県立大学環境科学研究科環境建築デザイン学科准教授）

豊島吉博（砥部むかしのくらし館館長）

広実敏彦（四国民具研究会副会長）

古賀瑞枝（周防大島町立久賀歴史民俗資料館学芸員／島の生活文化研究会学芸担当）

21世紀課題群と東アジアの新環境：実践志向型地域研究の拠点構築

Facing the Challenges of 21st-Century East Asia: Establishing a Network for Practice-Oriented Area Studies

プロジェクト概要

本拠点形成プロジェクトでは、非対称戦争とテロリズム、新型感染症と公衆衛生、環境問題や核管理、国境紛争と歴史問題、あるいは少子高齢化と社会保障など、緊急性を要する21世紀課題群と東アジアとの関係性に着目しながら、若手研究者の育成を軸に据えた現代中国研究の「対話型」研究プラットフォームの構築を目指しています。

本拠点形成プロジェクトの代表および参画メンバーが中心となる、有志の教員による「大阪大学中国文化フォーラム」は、2007年に組織化され、日本・中国大陸・台湾・韓国の国境を越えた学術交流である国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」(会議言語中国語)を十数年間にわたり主宰しており、息の長い人的交流を通じた対話の基盤を育ててきました。

よってこのプロジェクトでは、この貴重な資源や濃厚な実績を多分に活かしつつ、地域研究の学際性を「近現代の軌跡と前近代からの逆照射」という歴史的射程から捉えることにより、更なるグローバルな文理融合的課題を、歴史学を機軸とする地域研究の総合化(課題群の整序と認識枠組の再検討)における不可分の領域へと再配置しながら、実践志向型地域研究へと昇華させることを試みています。具体的には、国際セミナー開催を中心に、学生・若手研究者の積極的な参加を促す多様な企画を立案し、また「研究と教育の有機的連携」の活性化を目指しながら、「21世紀課題群と東アジアの新環境」を切り口として、新たな領域横断的研究・教育のプログラムの創成を追求しつつ、その成果をより豊かな国際関係の創出と提案に向けて活かしていくことを希求しています。

最終年度の実績

2024年度の成果について、『アニュアル・レポート 2024』をご参照ください。



研究期間全体における研究成果の概要

初年度から最終年度まで、経年的に公開シンポジウムを開催し、毎回100名ほどの参加者を得ることができ、いずれもOUFC (Osaka University Forum on China) Booklet (冊子体と電子媒体)としてまとめることができました。

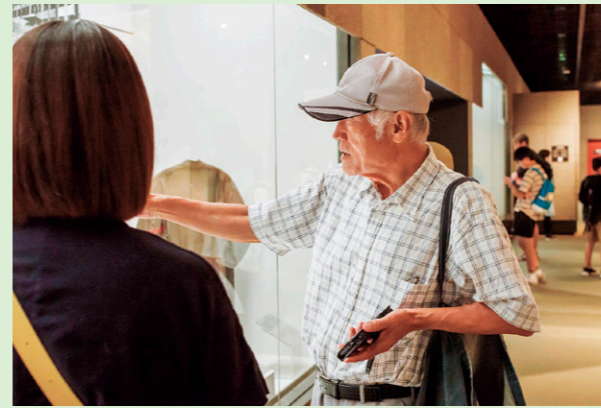
まず第1回目のシンポジウムでは、沖縄返還、日中国交回復、国連人間環境宣言の採択という戦後の節目となる1972年からさらに半世紀という2022年という時代の節目を強く意識しつつ、「この50年の歩みを共に考える——それぞれの出来事をいま振り返る意味」をテーマとして、その時代をリアルタイムでは経験していない若手研究者たちが協働しながら積極的に企画を立案し、それぞれ渾身の研究を披露しながら、参加者とともに考えていく場・空間の醸成を試みました。

2年度には、上述のように本拠点形成プロジェクトから、「記憶

の継承を祈念するグローバル・ダイアログ(記憶の継承ラボ)」を立ち上げることができました。それゆえに第2回目のシンポジウムでは、「記憶の継承ラボ」の立ち上げとその活動を踏まえながら、3人の学生たちの基調報告に加え、長崎城山小学校平和祈念館の平和案内人として長年尽力されている山口政則氏と松尾眞一郎氏に貴重なお話を伺うことができました。長崎の市民活動により被爆建物や遺構を残す運動が積極的に継続されていますが、その中で、城山小学校被爆校舎平和発信協議会前会長の内田伯氏が残された功績が大きいと山口氏は強調されていました。内田氏の「目から消え去る物は、心からも消え去る。原爆の遺構は、残すこと、見て感じることに意味がある」という大切な言葉も紹介されながら、その遺志を受け継ぎつつ地道に活動を継承されています。山口氏も松尾氏も被爆を経験されていないものの、長崎に共に暮らし続け、一人ひとりの被爆者に寄り添い、その言葉にならない想いも受け止めながら相互に支え合い、戦争経験や記憶を受け継ぐべく、未来世代に向けた平和活動を実践されています。こうした日々の暮らしの中で被爆者を支える平和案内人の方々へ感謝の意を深めながら、私たちが改めて気づかされたのは、戦争体験者と非体験者を繋ぐべく存在としての、現場の「伴走者」としての実践者の存在の尊さであり、まさに「ポスト体験時代の記憶の継承」において核心的な役割を果たしているのではないかと感じました。

こうして「記憶の継承ラボ」では、これまで長崎、そして沖縄、福島、水俣などの各地を訪れ、五感で学びの機会を得る一方、現場で尽力する実践家の方々から多くの示唆を頂くことができました。そして第3回目のシンポジウムの開催に繋がったのが、上述のように沖縄戦とその歴史を背負った現在について多様な学びと新たな視野の拡がりを頂いた沖縄訪問でした。

以上、これまでの成果の概要をまとめましたが、最後に展望についても言及しておきたいと思います。冷戦体制終結後の1990年代以降の日本では、敗戦を起点とする民主主義や平和、経済的繁栄に支えられてきた「長い戦後」意識が次第に相対化されていく中で、東アジアの近隣諸国との間でのアジア太平洋戦争の歴史認識をめぐる和解への取り組みが徐々に進んできました。しかし、2000年代の東アジアの共同歴史研究の過程で「正義」をめぐる、それぞれの国の間の隔たりが顕在化し、相互の歴史和解を依然として困難なものとしています。それゆえに、東アジアにおける歴史和解を進める上でとりわけ重要となる「謝罪」、「共同歴史研究」、「戦後補償訴訟」、そしてそれに加え、アジア地域の交流に共通する土台を探る必要性が、国際的にもいままさに提起されています。そこで私たちは、国家による加害や被害の歴史に回収しえない、戦中・戦後の一人ひとりの思想的営為を当事者と共に切り拓いてきた「伴走者」の模索とその実相に深い敬意を払いながら、ポスト体験時代の記憶の継承について、アジア地域史の視座から対話の



平和案内人・山口政則氏による長崎原爆資料館での解説
(2023年8月 人間科学研究科博士後期課程・吉成哲平さん撮影)



沖縄戦戦後文化資料展示館「ヒストリート」
(2024年10月人間科学研究科博士後期課程・吉成哲平さん撮影)

可能性を願いつつ、本拠点形成プロジェクトの終了後も、次世代とともに、その連帯に向けての可能性に目を向けてきたいと思えます。

なお、本プロジェクトに関連するウェブサイトも公開しており、今後も発展させながら随時活動を更新しておりますので、併せてご確認頂けますと幸いです(<https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp>)。

主な研究成果

- 三好恵真子・吉成哲平編『ポスト体験時代の記憶の継承——アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ——(「21世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ③)』OUFC Booklet Vol. 19、2025年
- 三好恵真子・吉成哲平編『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ(「21世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ②)』OUFC Booklet Vol. 18、2024年
- 三好恵真子・林礼釗・吉成哲平編『この50年の歩みを共に考える——それぞれの出来事をいま振り返る意味(「21世紀課題群と東アジアの新環境」シンポジウムシリーズ①)』OUFC Booklet Vol. 17、2023年

本プロジェクト全体を通しての発表論文や報告の詳細について、ウェブサイトをご参照ください。



プロジェクト代表者

三好恵真子 (大阪大学大学院人間科学研究科教授)

プロジェクト構成員(学内)

許衛東 (大阪大学大学院経済学研究科准教授)

高橋慶吉 (大阪大学大学院法学研究科教授)

豊田岐聡 (大阪大学大学院理学研究科教授)

宮原暁 (大阪大学大学院人文学研究科教授)

小林清治 (大阪大学大学院人間科学研究科准教授)

林礼釗 (明石工業高等専門学校教養学群助教/
大阪大学大学院法学研究科招へい研究員)

胡毓瑜 (大阪大学大学院人間科学研究科助教)

岡野翔太 (神戸大学大学院人文学研究科助教/
大阪大学大学院人文学研究科招へい研究員)

プロジェクト構成員(学外)

鄒燦 (中国南開大学日本研究院副教授)

江沛 (中国南開大学歴史学院教授)

許育銘 (台湾国立東華大学歴史学系副教授)

柳鏞泰 (韓国ソウル大学校歴史教育科教授)

周太平 (中国内モンゴル大学モンゴル学学院教授)

丸田孝志 (広島大学大学院人間社会科学研究科教授)

福田州平 (香港大学專業進修学院・人文及法律学院・学院助理講師)

田中仁 (公益財団法人東洋文庫研究部研究員 [大阪大学名誉教授])

オーラルヒストリー資料の保存・公開・活用に関する共同研究

Collaborative Research into the Preservation, Accessibility, and Use of Oral History Resources

プロジェクトの背景、目的と概要

インタビューを通じて当事者の記憶と経験を記録するオーラルヒストリーは、歴史学、社会学や人類学など多彩な分野で研究方法として広く認知されているだけでなく、「まちづくり」など人と人とを結びつける社会活動や演劇の創作など文化活動において市民によって有効な手法として活用されています。

海外では大規模図書館の部門のほか大学における専門のセンターなど拠点が数多く存在しており、そこでは幅広いテーマで実施されたオーラルヒストリーによって生まれた資料が保存され、研究・教育や利活用が推進されています。しかし、日本では拠点となる施設が乏しいだけでなく、既存の資料館や研究機関等に保存されている資料も、権利処理の難しさをはじめ様々な要因から活用に大きな制約を抱えている例が少なくないのが現状です。

本プロジェクトはこうした現状に向き合い、オーラルヒストリーにより生まれた、主として音声・動画資料の保存、そして活用に関わる課題を把握するとともに、課題の解決方法を学際的に検討し、得られた知見を発信することを目的とします。この目的のため、学内外にわたる、関連する専門分野の研究者や聞き取りを実践する市民、専門的な実務者の協働に基づくネットワークの構築を推進します。あわせて、将来的なオーラルヒストリー教育・研究の拠点を形成するための条件も検討したいと思います。

最終年度の実績

2024年度の成果について、『アニュアル・レポート2024』をご参照ください。各年度の成果については、以下で詳しく述べます。



研究期間全体における研究成果の概要

研究・教育活動

本研究計画の発足時に立てた目標のうち、具体的な成果が上げられた点について概要を述べます。

①オーラルヒストリー・アーカイブ・プロジェクト研究会の継続的实施

期間中に全7回の研究会を開催しました。これらの研究会のうち1回を除いてすべて公開で実施し、各会平均20名程度の参加を得ました。貴重なオーラルヒストリーの保存・活用事例にふれる機会を提供し、大阪大学が情報提供の主体になることができました。

- 第1回 山田菊子「インタビューをめぐる土木分野の3つの課題——調査と分析・手続き・蓄積」
- 第2回 ウォーターズめぐみ「British Libraryでのデジタル・アーカイブとオーラルヒストリー2000年代からの現地体験と報告」
- 第3回 菊池信彦「オーラルヒストリーデジタルアーカイブの構築実践と

実務課題の共有——Oral History Metadata SynchronizerとOmeka Classicを利用して」

- 第4回 松本彰伸「ハーバード大学ライシャワー日本研究所での研究報告——映像を用いた米軍占領期の聞き取り調査とアーカイブ構築の実践と模索」
- 第5回 武田和也「世界のオーラルヒストリーデジタルアーカイブ——「デジタル公共文書」の視点から」
- 第6回 原浩昭「沖縄県系移民音声史料の公開過程と展示での活用について」
- 第7回 村上潔「フェミニストアーカイヴィング実践におけるオーラルヒストリーの取り組み——イギリスの自律的地域アーカイブの事例からインターネットを含むオーラルヒストリーの公開方法の検討」

②資料館（アーカイブ）や図書館における資料管理方法の提案

(1) コロナ禍関係資料の保存について

2020年のコロナ禍から大阪大学文学部日本学専修ではコロナ禍関係の聞き取りに取り組んできました。2023年11月には、学生が主体となって聞き取りの成果をまとめた、大阪大学文学部日本学専修「コロナと大学」プロジェクト、安岡健一監修『コロナ禍の声を聞く：大学生とオーラルヒストリーの出会い』（大阪大学出版会）を刊行しました。本成果の刊行によって大阪大学が専門科目でオーラルヒストリーに取り組んでいる点が広く示されました。本成果は、下記のように新聞で紹介されたほか、持田誠氏が『記録と史料』35号、2025年3月、高田雅士氏が『歴史評論』892号、2024年8月で紹介してくださるなど、一般書ではありますが専門誌でも取り上げられています。

刊行にあわせて、2023年11月5日（日）には刊行イベント「コロナ禍をどう記憶するか」を開催して、感染症史研究の第一人者である飯島渉氏ほかを招へいし、シンポジウムを開催しました。その後、長崎大学熱帯医学研究所に異動された飯島氏の招きで、2025年6月にはコロナ関係資料の保存に関するシンポジウムに研究代表者が登壇しました。また、雑誌『公衆衛生』でも「記憶を残すためのインタビューという仕掛け」として聞き取り資料の保存について寄稿し（89巻7号に掲載）、人文学以外の立場にも発信を続けています。

(2) 図書館との連携について

研究期間中にとくに社会教育機関である図書館との連携には注力しました。とくに2023年度・2024年度に大阪府堺市立図書館と協力し市民への聞き取りを図書館の地域資料として保存するべく取り組みました。2024年度には連続講座を実施し、市民による聞き取りを実施しました。地域資料として口述資料を保存することができたことは、今後多くの場での応用可能性を持つと考えます。

(3) 聞き取りに取り組む市民グループとの連携

大学の役割として専門的手法を市民に伝え、その実践をサポー

トすることがあります。とくに大阪大学が位置する豊中市においては、以下のように住民と協力して聞き取りプロジェクトに取り組むことができました。

- ・2023年度に大阪府豊中市の市民と協力し聞き書き作品『寺本知さんってどんな人？』を作成しました。
- ・2024年度に神奈川県大和市の市民グループ「歴史工房・やまと」で講演しました。

(4) 日本国内の制度に即したマニュアルの検討

研究代表者のリサーチマップにて、オーラルヒストリー用のメタデータを公開しました。

(5) 海外のオーラルヒストリー実践についての紹介

グローバル日本学教育研究拠点の事業として、国際シンポジウムを開催しました。米国の第一人者であるMichael Frisch氏を招へいし、国内におけるデジタルヒストリー、パブリックヒストリー、オーラルヒストリーの関係者と協力して、シンポジウムを開催しました。シンポジウムの成果は『日本学報』43・44号（2025年3月）に掲載しました。

(6) オーラルヒストリーを行う／オーラルヒストリー資料を用いた教育実践

- ・大阪大学文学部・人文学研究科の専門科目、科学研究費プロジェクトと連携し、地域での聞き取りに取り組みました。
- ・大阪大学人文学研究科で取り組むデジタル・ヒューマニティーズの授業でゲスト講師を務めました。

社会への広報活動

また、これらの活動のうち、一部はマスメディアでも報道されました。計画期間中には積極的にプレスリリースにも取り組みました。

- ① 阪神大震災の被害、遺族の証言「オーラルヒストリー」きっかけはビートたけしさんの発言
読売新聞 2025年1月13日
- ② コロナ禍の記憶、後世に 阪大生聞き取り「生の言葉」出版
北海道新聞 2024年6月29日
- ③ 阪大生が体験聞き取り出版 コロナ 80人の口述記録
読売新聞（夕刊） 2024年3月19日
- ④ コロナ禍の学校 記憶を記録に
中日新聞 2024年3月1日
- ⑤ 地元のアレ 思い出のこそう 大阪市立図書館 住民から募り公開
朝日新聞 大阪版 2023年7月12日
- ⑥ 「すっごい人」「展示の印象ない」70年の大阪万博、地元の記憶は
朝日新聞 大阪版 2022年9月29日

これらを通じて、大阪大学においてオーラルヒストリーが専門領域の一つであることを広く知らせることができました。

プロジェクト期間（2022～2024年度）後の展開

研究のネットワーク化

国立歴史民俗博物館での企画展『歴史の未来』の展示プロジェクト委員として研究代表者が参加し、展示の作成に協力しました。展示会に関連するシンポジウムでの報告などを経て、令和7（2025）年度国立歴史民俗博物館日本歴史文化知奨励研究（公募型）で、新たな研究計画が採択されました。2025年度にはデジタル化した資料の展示と聞き取りを組み合わせた実践を行う計画です。オーラルヒストリーの実践を通じて、人文学のデジタル化と域学連携の橋渡しを展望しています。



国立歴史民俗博物館にて

学会開催

2025年度には、日本オーラル・ヒストリー学会の大会開催校を引き受け、9月13日・14日に大阪大学豊中キャンパスで実施しました。この3年間で取り組んだ研究成果およびネットワーク形成活動を通じて、大阪大学にオーラルヒストリー研究に取り組む研究者がいることは、一定程度明らかにできたと考えます。また、不足している国際連携についても、国際シンポジウムの実施などを通じて手がかりを得ることができました。

本格的な拠点形成には、人員配置およびカリキュラムの整理などが必要です。

主な発表論文

- 安岡健一監修、大阪大学日本学専修「コロナと大学」プロジェクト編『コロナ禍の声を聞く』大阪大学出版会、2023年
- 安岡健一「オーラルヒストリー問答：アーカイブ編」『歴史評論』892号、2024年8月、40-50頁
- 安岡健一「歴史学者の職能とオーラルヒストリー」『歴史科学』257号、2024年5月、2-15頁

本プロジェクト全体を通しての発表論文や報告の詳細について、ウェブサイトをご参照ください。



プロジェクト代表者

安岡健一（大阪大学大学院人文学研究科准教授）

プロジェクト構成員（学内）

菅 真城（大阪大学アーカイブズ教授）

プロジェクト構成員（学外）

- 五月女 賢司（大阪国際大学国際教養学部准教授）
- 福島幸宏（慶應義塾大学文学部准教授）
- 菊池信彦（国文学研究資料館准教授）
- 松本章伸（早稲田大学教育総合科学学術院 [学振PD：2022年10月より学振CPD]）
- 山田菊子（ソーシャル・デザイナーズ・ベース）
- 大野光明（滋賀県立大学人間化学部准教授）
- 小黒 純（同志社大学社会学部教授）
- 中村春菜（琉球大学人文社会学部准教授）
- 福山樹里（国立国会図書館占領期資料係）

明治期における伝統日本法紹介の試み——日独法学者による『令義解』独訳計画

Meiji Attempts to Introduce Traditional Japanese Law to the West:
On Joint Japanese/German Plans to Translate the *Ryō no Gige*

プロジェクト概要

このプロジェクトは、19世紀から21世紀にかけての西洋(欧米)における日本法研究史を描くことを最終的な目標としています。そして、そのなかで欠かすことができない、20世紀初めに、穂積陳重とヨーゼフ・コーラーという当時の日本とドイツを代表する法学者が協同して行った養老令の官撰注釈書である、右大臣清原夏野ら編纂の『令義解』(833年完成・翌年施行)の、ドイツ語翻訳事業の全貌を明らかにすることを目的としています。

19世紀後半、とりわけ幕末の「開国」を一つのきっかけに、日本社会のさまざまな文物が西洋社会で紹介されるようになりました。最も有名なのは絵画を中心とする芸術作品ですが、意外にも、「法」(=伝統日本法)もその対象となりました。

伝統日本法の紹介を、初めてある程度まとまって行ったのは、明治政府の法律顧問を務め、司法省法学校や東京大学法学部で教鞭をとったフランス人弁護士のジョルジュ・アッペール(司法省法学校の教師としてはギュスターヴ・エミール・ボワソナードが有名ですが、アッペールはその後任にあたります)だといわれています。そして、これはやがて、世界的に著名な比較法学者であるベルリン大学教授のヨーゼフ・コーラーの注目するところにもなりました。世界中の法を蒐集し、その比較を目指したコーラーは、かつてベルリン大学で学んだこともある東京帝国大学教授の穂積陳重(明治民法の重要な起草者の一人)に「日本古代法」の翻訳を依頼しました。困難な作業となることが予想され、なかなか陣容が固まりませんでした。穂積を中心に、明治38年から40年にかけて(推定)、主に廣池千九郎と津軽英麿により、『令義解』の翻訳が行われることになりました。

この事業に言及する書籍・論文は複数ありますが(最も優れた業績としては、利光三津夫「広池博士とその律令学」『続 律令制とその周辺』慶應通信、1973年、を挙げるができます)、資料にもとづいてその実態を示したものはありません。本プロジェクトでは、これを(伝統)日本法の国際紹介の先駆的試みと捉え(このような見方は、コーラーと穂積の関係に注目し、日独法学交流の先駆けとした石部雅亮「明治期の日本法学の国際的ネットワーク——穂積陳重・岡松参太郎とヨーゼフ・コーラー」早稲田大学比較法研究所編『日本法の国際的文脈』成文堂、2005年、に多くを負っています)、西洋における日本法研究史の冒頭に置かれるべきものとして、その

背景、内容、帰結を、日独に残された資料を用いて可能な限り明らかにしていきたいと考えています。

2025年の取組み・活動・成果等

今年力を入れたのは、関係者の資料調査です。2月に、千葉県柏市の公益財団法人モラロジー研究所で、廣池千九郎に関する資料を調査しました。慶応2年に豊前国に生まれ、教師となった廣池は、明治25年に歴史研究のために京都に移住します。そこで穂積の論文に出会い、東洋法制史研究を志すようになります。その後上京した廣池は、穂積の指導を受けるようになるのですが、ここで彼から翻訳事業への協力を求められます。廣池が行ったのは、『令義解』をドイツ語に翻訳するためにわかりやすい日本語に「翻訳」する作業だったと見られます。廣池が創設した麗澤大学の中に置かれているモラロジー研究所には、彼に関する資料が大変よく整理・保存されています。調査は、私と共同研究者の矢嶋光さん(名城大学准教授)とで行いました。新たな資料の発見には至りませんでした。翻訳作業のために使われた資料や、その様子を伝える書翰を閲覧・撮影することができ、大きな収穫を得ることができました。

3月には、青森県弘前市で津軽英麿に関する資料の調査を行いました。津軽は、明治5年2月、元左大臣、明治政府でも議定などを務めた近衛忠房の第二子(兄は貴族院議長の篤麿)として生まれました。祖父の元関白近衛忠熙に養育され、明治10年5月、元津軽藩藩主の津軽承昭の養子となりました。明治19年11月、一足先に留学していた兄篤麿の勧めにより、彼を頼って弟の鶴松(常磐井堯猷)とともにヨーロッパに渡りました。その後、英麿は、養父らによる再三の帰国要請を拒んで、長期にわたり(明治37年1月帰国)、主にベルリン大学に学びました。専攻は法学で、提出には至りませんでした。博士論文として *Die Lehre von der japanischen Adoption* (『日本養子論』)を準備していました(同書は1903年にドイツで出版されました)。英麿が『令義解』の翻訳事業に関わるようになったのは、ベルリン大学で彼を指導したのがコーラーで、また論文執筆のために資料を送付するなど支援していたのが穂積だったからです。ドイツ語翻訳を行った英麿の残した資料の調査は、本プロジェクトにおいてきわめて重要な位置を有するも

のだと考えています。調査は、私と共同研究者のウルス＝マティアス・ツァッハマンさん(ベルリン自由大学教授)、的場かおりさん(大阪大学教授)、矢嶋光さんで行いました。東奥義塾中学校・高等学校及び弘前市立弘前図書館に所蔵されている英麿関係の資料を閲覧・撮影することができました。

また、同じ3月には、共同研究者の福田真希さん(神戸大学教授)と、フランス法制史を専攻している法学研究科の大学院生(酒井あむるさん)が、フランス・パリでアッペールについての調査を行ってくれました。アッペールの生涯については、西堀昭氏の研究(『増訂版 日仏文化交流史の研究——日本の近代化とフランス』駿河台出版社、1988年)が大変詳しいですが、今回の調査では、フランス国立図書館、国立中央文書館において、アッペールが執筆した伝統日本法に関する書籍や論文の調査を行いました。

今後の展望・展開・課題

事業3年目となる2026年は、春に対面研究会を開催し、またオンライン研究会も2回程度行う予定にしています。基本的には、今年同様、3つのパート(「ネットワーク調査」パート、『令義解』邦訳調査」パート、『令義解』独訳調査」パート)ごとに研究を進め、成果を出せるようにします。

私と矢嶋光さんとで進めてきた『津軽英麿日記』の読解については、明治時代の日記の翻刻が一応完了しました。これから、崩し字読解に長けた研究者にメンバーに加わってもらい、より正確を期したうえで、2026年に本プロジェクトの最初の成果として翻刻の公表を予定しています。津軽日記には、翻訳事業に関係すると思われる記述も見られるほか、篤麿亡き後の近衛家の様子(後に総理大臣になる文麿も登場します)や、華族(当時英麿は、津軽承昭伯爵の養嗣子という立場でした)の日常生活も知ることができますので、多くの方に関心を持っていただけたと思います。また、福田さんと酒井さんに担当いただいているアッペールによるフランスにおける伝統日本法の紹介の詳細についても、2026年には何らかの形で公表する予定になっています。さらに20世紀初頭におけるフランスにおける日本法紹介については、在仏研究者に協力を仰いでより充実させていく予定です。

最後に、本プロジェクトの課題について述べます。昨年の

レポートでは多忙のため本プロジェクトを実施するための十分な研究時間を確保することができていないことを課題として挙げましたが、今年は、私が部局においてやや重い業務を担うことになり、また共同研究者の皆さんもより多忙になったため、昨年以上にこの問題が深刻になりました。予定よりも研究の進展が大分遅れ、例えば、今年実施する予定だった穂積陳重や、ベルリンにおけるコーラー及び津軽ら留学生に関する資料の調査は行うことができませんでした。当初の予定では、3年間でメンバーそれぞれが自身の成果を発表し、その後それをもとに原稿を作成して出版することを目指していました。しかし、このままのペースでは、3年間で全員が成果を発表するのは難しくなってきました。そのため来年は、メンバー(できれば若手)を追加し、研究体制を立て直して、できるだけ多くの成果を公表したいと考えています。

プロジェクト代表者

小野博司(大阪大学大学院高等司法研究科教授)

プロジェクト構成員(学内)

的場かおり(大阪大学大学院法学研究科教授)

プロジェクト構成員(学外)

Urs Matthias ZACHMANN(ベルリン自由大学歴史文化学部教授)

福田真希(神戸大学大学院法学研究科教授)

矢嶋光(名城大学法学部准教授)

拠点形成プロジェクト

2024年度採択 研究拠点構築型

キリタン新出資料の多角的分析：トゥールーズ断簡を中心に

Analysis of Catholic Missionary Document Fragments Discovered at the Bibliothèque de Toulouse

プロジェクトの目的と概要

このプロジェクトは、2024年4月、フランス南西部にあるトゥールーズ図書館 (Bibliothèque d'étude et du patrimoine, Toulouse) が所蔵する、キリタン版『サカラメンタ提要』(Manuale ad sacramenta ecclesiae ministranda, 1605年長崎刊) の表紙補強材であった反古紙の断簡が発見されたことを契機に、2024年度より始まりました。私たちはこの新出資料を「トゥールーズ断簡」と呼んでいます。

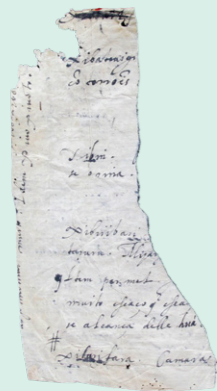
本プロジェクトの目的は次の2点です。

1. トゥールーズ断簡を手がかりに、キリタン版がどのように作られたのか、その制作過程を解明すること。
2. 近年見つかったその他のキリタン文献について、言語・歴史・思想など複数の角度から再検討すること。

トゥールーズ断簡は大きく四種類に分けられます。『サカラメンタ提要』の校正刷、キリタン版国字本『あにゆすていの功力の次第』(仮題、1591年加津佐刊か)、キリタン版『日葡辞書』(1603年本篇・1604年補遺長崎刊) 関連の手稿、ポルトガル語およびスペイン語で印刷された、信徒による信心活動組織であるコンフリリア (信心会/兄弟会) の免償状です。また、これらの断簡を表紙に収めていたトゥールーズ本『サカラメンタ提要』の本体も、現存する他本と異なる特徴が複数確認されており、この本の調査・分析も研究の重要な柱としています。『サカラメンタ提要』は、日本司教ルイス・デ・セルケイラが編纂した、日本の教会の秘跡(サカラメント) 執行のための典礼書であり、黒赤二色刷りの高度な印刷技術が用いられています。キリタン版の中でも司教が定めた格の高い一書であり、典礼史や音楽史の観点からも貴重な資料です。



トゥールーズ断簡 No. 23
『サカラメンタ提要』校正刷
©Bibliothèque d'étude et du patrimoine



トゥールーズ断簡 No. 11
『日葡辞書』補遺篇稿本
©Bibliothèque d'étude et du patrimoine

2025年の取組み・活動・成果等

2025年の活動は、(A) 成果発表 と (B) 調査 に分けられます。

(A) 成果発表

1. 論文

2025年3月、昨年度の研究成果の一部として、岸本・中野・白井・豊島による共著論文「キリタン新出資料・トゥールーズ断簡——日葡辞書稿本とキリタン版国字本を中心に——」を『大阪大学大学院人文学研究科紀要』2に発表し、大阪大学機関リポジトリでも公開しました。これはトゥールーズ断簡に関する最初の論文であり、2024年8月のワークショップでの議論がもとになっています。

その後の調査により新たな知見が多く得られ、次のワークショップやシンポジウムで報告を進めました。

(a) 2025年1月24日、ワークショップ“Indulgences and Confraternities” (於東京科学大学・ハイブリッド形式)

KISHIMOTO, Emi, “Two Indulgences of the Document Fragments in the Toulouse Library and Explanations of Indulgence in Japanese”

TRONU MONTANÉ, Carla, “Indulgences for Lay Confraternities and the Missionary Rivalry in early modern Japan”

Commentator: ORII, Yoshimi

コンフリリア (信心会) 研究のワークショップ第3回として開催され、岸本がトゥールーズ断簡に含まれる免償状を紹介し、それが日本語のキリタン文献でどのように説明されているかを示しました。

続いてTronuが、ヨーロッパで印刷されたと思われる免償状がなぜ日本のイエズス会に存在したのか、その背景として、鉢鉢修道会との対立に注目して分析しました。

(b) 2025年3月7日、シンポジウム“Exploring the Christian Culture in Early Modern Japan through the Newly Discovered Toulouse Fragments” (於大阪大学・ハイブリッド形式)

KISHIMOTO, Emi and SHIRAI, Jun, “Agnus Dei no kuriki no shidai: a Japanese adaptation of the Portuguese text *Summario das virtudes da sancta reliquia Agnus Dei*”

TRONU MONTANÉ, Carla, “Contextualizing the prints on indulgences identified in Toulouse: laity and the rivalry between Jesuits and Mendicants in the early modern Japanese mission”

NAKANO, Haruka, “The features of definitions in Portuguese written in the fragment 01 of the manuscript of the *Vocabulario da Lingoa de Japam*”

KUROKAWA, Mari, “Methods of corrections in the early Japanese Christian mission press as witnessed by the proofsheets of *Manuale ad Sacramenta Ministranda* in the Toulouse library fragments”

Facilitator: TOYOSHIMA, Masayuki

シンポジウムは三つのことを目的にしました。第一にトゥールーズ断簡の四種類をすべてとりあげること、第二に英語で発信すること、第三に、メンバー間で共有した最新の成果を報告することです。『あにゆすていの功力の次第』、免償状、日葡辞書手稿、『サカラメン

タ提要』校正刷のそれぞれに関して報告と質疑応答がされ、このシンポジウムを通じて、宣教師・信徒の活動、翻訳の方法、辞書編纂、印刷文化など、16-17世紀のキリタン文化の新たな側面が見えてきました。



3月7日シンポジウムの様子



3月7日シンポジウムのフライヤー

2. その他の論文・学会発表

上記のほか、「あにゆすていの功力の次第」および日葡辞書関連手稿に関して、次のように論文が刊行され、国内外にて口頭発表がおこなわれました。

(c) 白井純「キリタン版の版式」鈴木俊幸編『様式と造本』平凡社 2025年5月

(d) 3月30日、第2回広島言語研究集会 (於社の街グレース会講堂) 白井純「平仮名の濁点表示と文字遣準拠の優先順位について——キリタン版前期国字本の状況」

(e) 6月7日、キリタン学研究会第7回例会 (於早稲田大学・ハイブリッド形式)

岸本恵実「トゥールーズ断簡・新出キリタン版『あにゆすていの功力の次第』(1591年加津佐刊か) について——信仰具 Agnus Dei をめぐるキリタン文化およびオラショとしての伝承」

(f) 9月11日、第28回ブラジル日本語・日本文学・日本文化大学教師学会・第15回ブラジル日本研究国際学会 (於アマゾンズ連邦大学) 白井純「キリタン版『落葉集』の成立過程について」岸本恵実「トゥールーズ図書館所蔵の日葡辞書稿本について」

(g) 9月15日、講演会「イエズス会が作った日本語辞書に関する最新研究」(於サンパウロ大学・ハイブリッド形式)

岸本恵実「トゥールーズ図書館で発見された日葡辞書稿本について」白井純「イエズス会宣教師がみた日本の漢字 キリタン版『落葉集』にみる日本語学習」



9月15日サンパウロ大学での講演会

(h) 10月5日、第22回キリタン語学研究会 (オンライン) 岸本恵実「キリタン用語「功力(くりき)」について」

(i) 10月18日、第133回訓点語学会研究発表会 (オンライン) 岸本恵実「トゥールーズ断簡『日葡辞書』補遺篇稿本について」

2026年1月に中野による上智大学国文学会での発表が予定されており、2026年2月にはプロジェクトのワークショップも計画しています。

また、トゥールーズ断簡全体を総括する論文集の刊行準備も進行中です。

(B) 調査

2025年の調査として、トゥールーズ図書館のかたがたのご協力のもと、2025年5月岸本・白井・下岡、7月黒川、10月豊島が、それぞれ原本調査をおこないました。トゥールーズ断簡および『サカラメンタ提要』の書誌調査と、この資料が図書館に入った経緯についても調査を進めています。

10月岸本が、北京の中国国家図書館に所蔵されているキリタン版の調査をおこないました。

また、国内で所蔵されている『サカラメンタ提要』の2点、上智大学キリタン文庫本と東洋文庫本を、11月、それぞれの図書館にて共同調査させていただき、複製や公開画像と見比べながら、現存諸本間の比較をおこなうことができました。『サカラメンタ提要』は10点の現存が知られていますが、諸本比較の詳細な研究はまだありません。今回の調査は、その第一歩となる成果です。

今後の展望・展開・課題

トゥールーズ断簡の発見以降、この資料を起点として、既知のキリタン版や関連文献を見直す動きが広がっています。たとえば、日葡辞書関連の手稿がキリタンの辞書編纂の実態解明に、「功力の次第」がキリタン版前期国字本の印刷や潜伏キリタンのオラショ研究に、『サカラメンタ提要』の校正刷や諸本比較が、キリタン版の料紙研究に、それぞれ波及しており、研究の可能性が大きく広がりました。

今後は、トゥールーズ所在の資料を中心としつつも、関連する他資料にも視野を広げ、国内外に向けて口頭発表・出版を積極的に進めていきます。また、プロジェクトメンバー以外の研究者とも連携し、幅広い資料を総合的に分析していく予定です。

プロジェクト代表者

岸本恵実 (大阪大学大学院人文学研究科教授)

プロジェクト構成員 (学内)

岡島昭浩 (大阪大学大学院人文学研究科教授)

プロジェクト構成員 (学外)

黒川茉莉 (日本学術振興会特別研究員 [PD] / 国立国語研究所外来研究員)

中野 遙 (上智大学基盤教育センター特任助教)

Martin NOGUEIRA RAMOS (フランス国立極東学院准教授)

折井善果 (慶應義塾大学法学部教授)

下岡絵里奈 (トゥールーズジャン・ジョレス大学

外国語学部日本語専任講師)

白井 純 (広島大学大学院人間社会科学部研究科教授)

豊島正之 (上智大学名誉教授)

Carla TRONU MONTANÉ (東京科学大学リベラルアーツ研究教育院准教授)

三木学の国際拠点形成

—— 哲学的人間学の可能性、人類学と協同主義の交錯と広がり

Establishing an International Miki Studies Center to Explore the Intersections
Between Philosophical Anthropology and Corporatism

プロジェクトの概要

近年、国内外の西欧中心の哲学を乗り越える世界哲学を目指す中で、日本哲学を代表する西田幾多郎のみならず、その弟子のひとり、経済学、社会学、人類学とかかわりながら協同主義 corporatism の議論を戦前の日本で展開した哲学者、三木清への注目度が高まっています。それにたいして日本国内の日本哲学や日本学では、三木と同じ京都学派である西田、田辺、九鬼などについては多くの研究蓄積があるものの、三木についての研究は十分ではなく、またその研究拠点形成も行われてきませんでした。本課題ではこの状況に応じるべく、以下の点を目的として設定します。

1. 近年国際的に注目されつつある日本の哲学者・三木清の事績について、領域横断型の国際研究拠点を形成すること。
2. 三木清研究（以下、三木学と呼称する）に資する大阪大学内の研究リソースを集約し、実質的な研究交流と推進を促進すること。
3. 大学間協定などに基づく国際的な研究リソースを三木学の拠点形成のために再編すること。
4. 新学術領域の創設に向けた下地を作るべく、領域横断（人類学、社会学、政治学など）を可能とする研究者を三木学の形成という観点から連携強化すること。



三木清
出典：『三木清著作集 第5巻（哲学論稿）』
岩波書店、1949年

近年、同時代のフランクフルト学派やデュルケム学派との比較研究がすすむなかで、三木の哲学の国際的な独自性が徐々に再評価されつつあります。とくに本プロジェクトで注目するのは、彼の哲学のなかにおこまれている社会学、経済学、人類学、政治学の総合的知見であり、この点を領域横断的に解明することが目指されます。

三木清は、哲学という学問領域にとどまることなく、様々な時事情勢の分析や社会運動の組織化、政策提言会議などへの参加を行ってきました。そのため、それらの社会的実践を彼の哲学と密接に連携して理解し、同時に、その実践を現在の社会状況を踏まえて再活用することは、近年の大学が求められる社会連携の観点からも、参照すべき意義のあるものであると思われます。

本プロジェクトでは、国内外の様々な機会を利用しておこなわれるプロジェクト構成員らの研究成果を集約し、また研究会の開催などを通じて研究交流をはかることで、最終年度にはそれらの成果をまとめた書籍出版をめざしています。

2025年の取組み・活動・成果等

国際ワークショップ The First Workshop on Miki Studies

日時：3月21日 [金] 13:00-17:00

Keynote Presentation

KONDO Kazunori (Osaka University Graduate School of Human Sciences)

“The Philosophy of Institutions: From Miki Kiyoshi to Nakamura Yujiro”

NAKAMURA Yoshifumi (Osaka University Graduate School of Human Sciences)

“Event, Encounter, and Rhetoric: On Miki Kiyoshi’s Anthropology”

MATSUGI Takaya (Osaka University Graduate School of Human Sciences)

中日の近代哲学・思想の交差とその実践

第14回共同研究会

日時：2025年5月17日 [土] 10:00-17:50

会場：京都大学人文科学研究所（1Fのセミナー室1）

近藤和敬

「三木清のパスカルと田辺寿利のパスカル

—— フランス哲学とフランス社会学の交差性」

GJS-ERI 拠点形成プロジェクトシンポジウム

『九鬼周造の人間学：破綻と再建』合評会

日時：8月3日 [日]

会場：大阪大学中之島センターセミナー室6E + オンライン

登壇者

檜垣立哉（専修大学）、織田和明（大阪大学）、佐藤 虎（専修大学）、高橋 悠（東京女子大学）、八杖春樹（立正大学）



拠点形成プロジェクトシンポジウム
『九鬼周造の人間学：破綻と再建』合評会の登壇者

三木学セミナー

“Relating Miki Kiyoshi’s Logic of Imagination Together With Benedict Spinoza’s Conception of Imagination and Multitude—How can Such a Political Imaginary Influence Our View of the Democracy?”

日時：9月6日 [土]

会場：人間科学研究科本館34教室

登壇者

Julia Maslon (Katholieke Universiteit Leuven, University of Edinburgh)

三木清『構想力の論理』読書会（8月後半～現在）

メンバーの織田を中心に、三木清に関心のある学内外の若手研究者が、おおよそ週一回のペースでオンライン上に集まって『構想力の論理』の読書会を実施しています。

今後の展望・展開・課題

来年度からは本格的に、国内外のネットワークをいかした研究会の共同開催などを進めていきたいと考えています。また、西田研究や九鬼研究などとの比較も行えるよう、国内外の研究者に広く連携できる体制をとりたいと考えています。

プロジェクト代表者

近藤和敬（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）

プロジェクト構成員（学内）

齊藤弥生（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

山崎吾郎（大阪大学COデザインセンター教授）

織田和明（大阪大学大学院情報科学研究科特任助教（常勤））

プロジェクト構成員（学外）

檜垣立哉（専修大学文学部教授）

Thierry HOQUET（パリ・ナンテール大学教授）

Elie DURING（パリ・ナンテール大学准教授）

LIAO, Chin-Ping（中山大学哲学学科教授）

玉田龍太郎（滝川中学校・高等学校教諭）

協力機関連携機関

専修大学

パリ・ナンテール大学

中山大学

アフリカ日本学会からの学びを通じた連携の構築と強化

Learning from and Promoting the African Association for Japanese Studies

The 2025 academic year marked the launch year of this project, “Learning from and Promoting the African Association for Japanese Studies.” Our main endeavor this year was to organize and conduct, in close association with the Global Japanese Studies Education and Research Incubator, an international symposium titled “Globalizing Japanese Studies in the Age of the Rising Global South.”

The immediate purpose of this three-year project as a whole is, as its title suggests, to learn about initiatives in Japanese studies underway in the African continent, especially those under the aegis of the African Association for Japanese Studies (AAJS); to contribute to and learn from the endeavors of that association; to extend thereby the global reach and network of the Incubator here at the University of Osaka; and thus to strengthen both our own programs here and those of AAJS through reciprocal support and collaboration.

Toward those ends, this year, we invited to our campus Professor Adedoyin Aguoru of the University of Ibadan, who is president of AAJS, to learn more about her and her organization’s work. We hosted a symposium to think about AAJS in the context of other flagship Japanese-studies endeavors in South America and the Arab world, or in other parts of the so-called Global South. We also established contact with and developed ties with other Japanese-studies scholars and organs across the African continent.

The visit of Professor Aguoru to our campus and the symposium in which she partook revealed both vast opportunities and points meriting caution. We learned of the acclaim that AAJS and Professor Aguoru have earned just in the past year for their genuinely unprecedented work in promoting Japanese studies in Nigeria. Those plaudits point to deep potential for the expansion of Japanese studies both among academic institutions and in conjunction with government and civil-society organizations. We further learned of the new successes of AAJS in installing and promoting an undergraduate division of their organization. The undergraduate branch promises to offer a mechanism by which



International Symposium: “Globalizing Japanese Studies in the Age of the Rising Global South”(the University of Osaka Minoh Campus, December 13, 2025)
Prof. Adedoyin AGUORU

to perpetuate across generations the outstanding work this generation of scholars has done. At a broader level of methodological abstraction, it also provides a means to unite efforts at scholarship and efforts at education, which often remain sharply divided in sister organizations.

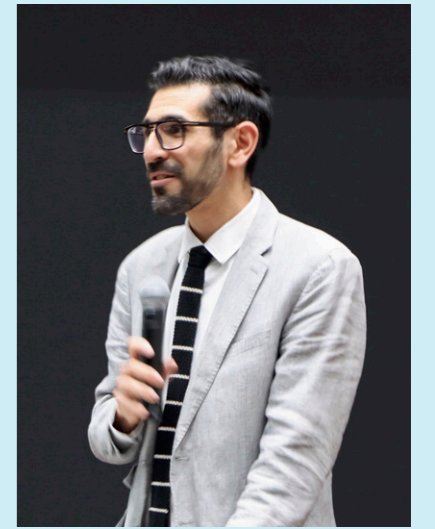
It is clear that hurdles remain despite these signs of progress, hurdles that this project seeks to clear or at least to lower. Notwithstanding the consistent publication for several years by AAJS of a journal on Japanese studies, some in the symposium were surprised to learn of the existence of the journal. That lack of knowledge pointed to continued geographic siloization in global Japanese studies. Indeed, it became clear at the symposium that the presence of African or Africa-based scholars of Japanese studies in sister organizations in the so-called Global North remains at best minimal. Such an absence in itself perpetuates further absence; lack of representation itself constitutes a hurdle to participation, and creating the catalyst or generating the activation energy to overcome these barriers remains pressing. Some at the symposium deplored what they perceived to be continued prejudices or ignorance about Africa in the academy.

Situating AAJS and Japanese studies in broader context at the symposium helped to clarify both persistent

questions and paths forward in ways that would be difficult without that context. One familiar, perennial concern was the degree to which the category of “Global South,” or even of “Africa,” is at all legitimate or constructive. Obviously derived from colonialist modes of thought, the category might in itself act as a barrier to integration and militate against the very anti-colonial orientation for which it stands. But denying that category, too, might be to deny the reality of the history that induced the category in the first place, to diminish the real inequalities that that history has engendered, and to remove the categorical possibility of prying open commonalities resulting from what might be a shared historical experience. Another question that emerged was the degree to which perceptions of Africa, and indeed the Global South generally, have changed in recent years. In some ways, the change might be tending toward increased distance and prejudice. But other perspectives suggested decisive progress in interest in, concern for, and knowledge of especially Africa in Japanese popular and academic circles. Across all contexts, the need for both individual initiative and solid institutional support for Japanese studies became abundantly clear.



Prof. ABE Maya



Prof. Amin GHADIMI

These insights from the symposium point to the need for continued integration and collaboration in the field of Japanese studies across continental boundaries. That collaboration is both a means and an end: it is both the method and the purpose. And insofar as method and outcome, motivating theories and practical results, are reciprocally constitutive, they must together become the object of investigation. The subjects of that investigation cannot be limited to those on one continent or another. Promoting further research exchange, and, crucially, education exchange, remains our priority in the years remaining.

Project Representative

Amin GHADIMI
The University of Osaka Graduate School of Humanities, Associate Professor

University of Osaka Collaborators

ABE Maya
The University of Osaka Center for Multilingual Education,
Specially Appointed Associate Professor

External Collaborators

Adedoyin AGUORU
University of Ibadan, Professor;
African Association for Japanese Studies, President

Nodhar HAMMAMI
University of Kairouan, Assistant Professor

Dagmawie TESFAYE
Addis Ababa Science and Technology University, Faculty Member

デジタル人類学で拓く「デジタル日本学」教育のグローバル展開

Advancing Global “Digital Japanese Studies” Education Through Digital Anthropology

プロジェクトの目的と概要

本プロジェクト「デジタル人類学で拓く『デジタル日本学』教育のグローバル展開」は、デジタル技術と人文社会科学（特に文化人類学）の知見を融合し、新たな教育コンテンツを体系的に開発・共有することを目的としている。社会のデジタル化が進展する中、ウェブ調査、オンライン・コミュニティ分析、ソーシャルメディア調査などのデジタル・メソッドが人文学研究において重要性を増している。しかし、人文学系研究者がこれらの手法を体系的に学べる環境は十分に整備されていない現状がある。本プロジェクトは、この課題に対応し、人文学におけるデジタル手法の導入と教育を本学から先導するための教育基盤を整えることを目指している。

特に、①Zotero、Notion、Obsidian等の基盤的デジタルツール、②ウェブ・クロウリングやハイパーリンク・エスノグラフィ、③ソーシャルメディア・エスノグラフィ、④データ可視化やネットワーク分析など、初歩から応用まで段階的に学べる教材群の作成を進めている。また、欧州で先端的なデジタル・メソッド研究が進むアムステルダム大学との連携を視野に入れつつ、国際的な視点を取り入れた教材開発を進める点も特徴である。

さらに、完成した教材をOUKAを通して広く学内外へ共有し、国内の教育機関におけるデジタル人文学教育の共通基盤形成に寄与することを目指す。加えて、本学が参画する「研究データエコシステム構築事業」とも連携し、データ収集から分析・共有に至る研究データのライフサイクルを意識した教育リソースの整備を進めている。

2025年度はその初年度として、教材作成の基盤固め、デジタル・メソッドの整理、国際連携に向けた情報収集、学内外コミュニティ形成など、多面的な準備を進めた。

2025年の取組み・活動・成果

(1) 教材開発の準備と基礎的コンテンツの作成

2025年度は教育コンテンツ開発の基盤整備を重点的に進めた。「人文学とデジタル技術」科目で使用した教材や授業設計をもとに、教材体系の構造化を行い、Zotero、Notion、Obsidianといった基本ツールの使用方法について、初心者向

けガイドの章立てやテンプレート設計を進めた。また、これらのツール活用がデジタル人類学の実践とどのように結びつくかを明確化する導入テキストを整備し、教材群の骨格形成を進めた。

(2) 先端的手法（デジタル・メソッド）の教材化に向けた取り組み

ハイパーリンク・エスノグラフィ、ウェブ・クロウリング(Hyphe)、ソーシャルメディア・エスノグラフィなど、国際的にも注目されているデジタル・メソッドの教材化に向けた検討を行った。その一環として、ウェブクロウリングツールHypheの操作手順を整理し、授業・研究での実践例を踏まえたマニュアルの作成に着手した。Hypheマニュアルは2025年度中にOUKAで公開予定であり、今後の教材群の中核的要素となる。

(3) 国際連携の強化：アムステルダム大学への短期滞在

2025年8月上旬から下旬にかけて、アムステルダムへの短期滞を実施し、アムステルダム大学の研究者との連携を図った。滞在中は、アムステルダム大学の研究者と意見交換を行った。一部の教員にはプロジェクトメンバーに加わってもらい、本プロジェクトの計画に対する助言を受け、教育コンテンツの国際水準化に向けて重要な知見を得た。

(4) 学内外コミュニティ形成：デジタル人類学リーディンググループの立ち上げ

2025年10月より、プロジェクトメンバーおよび学生を対象とした「デジタル人類学リーディンググループ」を月1回の頻度で立ち上げた。大学院生・学部生に開かれた形式で実施し、デジタル人類学に関する文献輪読や手法のディスカッションを通じて、学習コミュニティが形成されつつある。これにより、教材利用者層のニーズ把握や、初学者がつまづきやすい論点の把握にもつながり、教材開発における実践的知見の蓄積が進んだ。

(5) 外部への広報・情報発信

学外の研究者・学生に向けてプロジェクトの概要やリーディンググループの案内を発信し、早期の周知を図った。これに

より、2026年度以降の教材公開に備え、潜在的な利用者層との接点形成を進めることができた。

今後の展望・展開・課題

2026年度以降は、本年度に構築した教材骨格をもとに、具体的な教育コンテンツの開発と公開を進める。特に、ハイパーリンク・エスノグラフィ、ソーシャルメディア・エスノグラフィ、データ可視化など、デジタル人類学の主要手法について、学習ステップの明確化と演習教材の整備を重点的に進める予定である。また、ワークショップ形式の教員研修や大学院生向け演習を実施し、教材の実用性の検証と改善を行う。

一方で課題として、①多様な学習者層に対応した教材設計、②高度な技術内容と人文学的思考のバランス、③国際的な教材基準との整合性、が挙げられる。特にデジタル技術に不慣れな人文学系研究者にとって理解しやすい教材作りは重要であり、学内外からのフィードバックを踏まえた継続的改善が不可欠である。

また、教材共有に向けて、教材の仕様統一やユーザーガイドの作成など、教育基盤としての要件整備も進める必要がある。さらに、研究データエコシステムとの接続も視野に入れ、研究データ管理・公開教育と連動可能な教材設計を検討していく。

今年を振り返って

2025年度は、本プロジェクトの基盤形成に向けて、教材作成準備、国際連携のための情報収集、学内外コミュニティ形成、広報等が大きく進展した点が特筆される。特に、Hypheマニュアルの作成開始、リーディンググループの立ち上げ、国際的視点を取り入れるための現地調査の実施は、2026年度以降の教材公開・共有に向けた重要な成果である。これらの取り組みにより、今後の教育コンテンツ開発と国際連携の基盤が着実に形成された。

プロジェクト代表者

菅原裕輝（大阪大学大学院人文学研究科人文学林講師）

プロジェクト構成員（学内）

神崎隼人（大阪大学附属図書館研究開発室助教）

甲斐尚人（大阪大学D3センターデータビリティプラットフォーム研究部門准教授）

鈴木和歌奈（大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻講師）

プロジェクト構成員（学外）

内尾太一（静岡文化芸術大学文化政策学部准教授）

山崎真帆（東北学院大学情報学部データサイエンス学科講師）

Rens Wilderom（University of Amsterdam, Faculty of Social and Behavioural Sciences, Lecturer）

拠点形成プロジェクト

2025年度採択 研究拠点構築型

東アジアへ拓かれた「戦後日本」の記憶の継承： 地域間を結ぶ対話と歴史実践の拠点構築

A Memory Network for East Asian Dialogue and Historical Practice on “Postwar Japan”

プロジェクト概要

アジア・太平洋戦争の終結から80年が経ち、戦争体験者の証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」が到来しつつある現在、戦争体験や記憶の継承が喫緊の課題となっています。特に、継続する冷戦状況に今なお強固に規定されている東アジア情勢に鑑みれば、「戦後史」を東アジアの同時代性の中に位置づけ直しつつ、さらには第二次大戦後の様々な戦争の経験とも応答させながら現在への連続性を問うことで、紛争や対立を生み出さない「アジア地域史像」の構築が急務であることは間違いありません。

こうした社会的背景の元で、有志の教員により組織化された「大阪大学中国文化フォーラム」が2007年より実施してきた日本・中国大陸・台湾・韓国の国境を越えた学術交流の実績を受け継ぎ、研究代表者らは、2023年から「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」を展開してきました。このラボでは、とりわけ次世代を担う学生たちの主体性に期待しつつ、長崎、沖縄、福島、水俣など各地での交流活動を通じて戦争・戦後体験の意味を受け止める学びの機会を提供しています。

これまで各地の現場から見てきたのは、体験者と非体験者を繋ぐべく存在である「伴走者」たちに受け継がれてきた、「ポスト体験時代の記憶の継承の核心」としての生活者の思想的営為の重みです。その一方で、長年にわたり継承活動を開拓してきた実践者たちが、今後も活動を持続させていくために、さらに他地域における実践の経験との応答や連携を希求していることも分かりました。

そこで本プロジェクトでは、これらの基盤を更に発展させ、特に戦無派世代の若手研究者たちを軸に据えながら各地の実践者同士の対話を紡ぐことで、継承活動の結節点としての役割を果たしつつ、戦争や災禍の記憶の継承における地域間の連帯を共に実現していくことを試みていきます。そして、それぞれの地域史から浮かび上がる東アジアの「戦後」とその連累を私たちが受け止め直していくという「歴史実践 (doing history)」へと拓いていくことを目指します。具体的には、現場の実践者同士が触発し合う交流空間が欠如している現状を打破するために、現地での交流や公開シンポジウムの開催等、実践者や研究者のみならず市民も積極的に参加することを促す装置を立案することで、「ポスト体験時代」における記憶の継承の更なる活性化へ繋げていきます。すなわち、「戦後日本」の各地域が抱えてきた東アジアを巡る歴史記憶を共に問い直していく領域横断的研究へと昇華させつつ、次世代への大学教育における社会学連携的・学際的な研究教育プログラムの創成を追求していきます。

2025年の取組み・活動・成果等

以上を踏まえ、本拠点形成プロジェクト初年度となる2025年度は主に長崎と沖縄の現場の実践者の方々にご協力頂きながら以下の取り組みを実施しました。まず、2025年7月28日（月）から30



展示風景（2025年7月吉成哲平撮影）

日（水）にかけて、大阪大学人間科学研究科本館1階・インターナショナルカフェにて写真展「戦後」の生活者の思想的営為の記憶とその現在」を開催しました。とりわけ本展では、記憶の継承に尽力する各地のフィールドにてこれまで私たちが撮影を続けてきた写真の展示とギャラリートークを通じて、アジア・太平洋戦争からの復興後も人びとが様々な傷跡や語り得ない体験を抱えながら営んできた生活の現実と、さらには東アジアの激動する歴史との結びつきについて参加者と共に考えることを目指しました。

会期中は猛暑にも関わらず学内外から延べ50名の皆様にご来場頂くと共に、研究代表者である筆者から撮影写真に関するギャラリートーク（各回約30分）も毎日実施しました。参加者からは、見過ごされがちな「戦後」の暮らしとその現在への連続性について考えさせられたという貴重な感想を頂きつつ、各自が生まれ育った地域における戦争や戦後体験を顧みながら対話する機会にも恵まれました。

また、同展を開催した今年7月末には、人間科学研究科・共生の人間学研究分野（現・福祉と人間学）と「記憶の継承ラボ」の共催にて昨年2024年2月に実施したシンポジウムの総括として、大阪大学中国文化フォーラムよりブックレット『出来事の記録と生の記憶 クロード・ランズマン『SHOAH』をみる』（中谷碩岐・瀧口隆・吉成哲平編、三好恵真子監修）の電子版 (<https://hdl.handle.net/11094/102323>) と冊子体の刊行に至りました。本書の第一部には、ホロコーストの生還者の証言を記録した映画『SHOAH』（1985年）が問う出来事の「表象不可能性」と向き合いながら基調報告を行った諸領域の若手研究者たちによる充実した論考が収録されています。また、第二部では登壇者たちがシンポジウム当日の白熱した議論を振り返りつつ、中東情勢や「記憶の継承」を巡る今日の状況も踏まえながら総合討論を深化させています。さらに、第三部では本書ならではの魅力として、当日のシンポジウムに参加して頂いたディスカッションの先生方による示唆に富む論考に加え、5名の若手研究者たちがそれぞれの専門性からシンポジウムへと応答した寄稿文も収録しており、「戦後80年」を迎えながらも世界各地にて絶え間なく戦争の続く厳しい現状に対してそれぞれの立場から応えていくことを試みました。

こうした一連の活動成果は、記憶の継承の現場でのフィールド

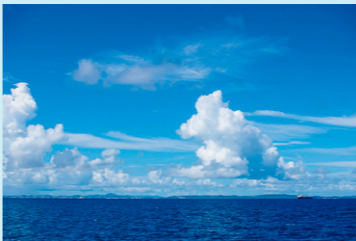


長崎市内でのフィールドワークの様子（2025年8月吉成哲平撮影）

ワークを通じた学びの深化へも活かされています。具体的には、被爆校舎から原爆体験を伝え続けている長崎城山小学校平和祈念館へ、「長崎原爆の日」である8月9日に合わせて人間科学研究科／人間科学部の学生たちが中心となり訪問し、「被爆者なき時代」が迫りつつある今日の被爆体験の継承を巡る模索について貴重な示唆を頂きました。とりわけ、今年で被爆から80年という節目を迎えた長崎の城山小学校にて執り行われた第888回平和祈念式では、被爆校舎の保存に長年尽力された内田伯氏（2020年4月に逝去）による「目から消え去る物は、心からも消え去る。原爆の遺構は残すこと、見て感じる、伝えることに意味がある。」という志が、世代を超えて児童の皆さんへと着実に受け継がれていることを学ぶ機会も頂きました。こうして長崎において長年にわたり被爆体験の継承活動に身命を賭してきた現場の方々と共に「原爆の日」を過ごさせて頂いていることの有り難さを改めて噛み締めています。

さらに9月初旬には、「基地の街」、「戦後沖縄の縮図」とも形容される沖縄市の戦後史を見つめ直している沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」（以下、「ヒストリート」）に携わる実践者の方々のもとを再訪しました。今回の訪問では、沖縄が「復帰」に揺れ動いた1970年前後のコザを中心に撮影された写真記録が放つ重みについて教示頂きました。加えて、昨年2024年10月に「ヒストリート」のご協力の下で開催したシンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承——アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ」を通じ活発に展開された議論を巡り、登壇して頂いた実践者の方々と共に振り返る中で、地域史の編纂を担う立場として人びとの戦争・戦後体験を聞き取り、さらには記録として後世に残すことの重要性やその困難等も伺いながら、戦争を起さないうためにいま私たちに出来ることについて様々な示唆を頂きました。いつも私たちが温かく迎えて下さっている現場の実践者の皆様へ厚く御礼申し上げます。

以上で述べた現場での学びの数々を念頭に置いて更に目を向けていく必要があるのは、戦前から「戦後」へと連なる生活の歴史の厚みについて、実践者たちが暮らしの中で次第に学び直しながら人びとへ伝えようと探求し続けてきたというそれぞれの模索の諸相であると考えられます。そこで、今年度末である2026年2月にはシンポジウム「戦後」から問い直されていく生活の歴史の



久高島への航路から遠望する沖縄本島中部地域（2025年8月吉成哲平撮影）

厚み——それぞれの地域史を伝え継ぐ「伴走者」たちとのダイアログ（仮）を開催する予定でしたが、企画をより練り上げるために次年度の夏頃へ延期し、引き続き準備を進めています。本シンポジウムでは、これまで現場で撮影してきた写真に関するギャラリートークに加え、長崎と沖縄にて記憶の継承活動に心血を注いできた実践者同士の対話を試みることで、「戦後史」に留まらない動態的な歴史過程として人びとの生活を捉え直してきた各地の模索を眼差しつつ、戦後日本社会において未だ忘却されがちな地域史の中の東アジアとの関わりについて見つめ直していくことを目指します。

今後の展望・展開・課題

今年度の活動成果を踏まえ、今後はさらに水俣や福島にて忘れてはならない歴史を伝え継ぐ現場との連携も深めていきたいと考えています。特に、私たちがこれまで両地域にて内省してきたのは、東アジア冷戦体制下において戦後日本社会の復興と高度経済成長が成し遂げられていく過程で生み出された構造的な課題が、今日の各地域における過去の表象やその継承の形を複雑に規定しているのではないかという現実でした。これは前述した長崎と沖縄における記憶の継承のあり方や地域間の歴史的な繋がりについて考える上でも示唆的であると思われます。従って、引き続き本プロジェクトでは、見過ごされがちな「戦後」において人びとが切り拓いてきた日常の暮らしについて各地の現場にて学びつつ、さらには地域間の連携を加速させていくための勉強会やシンポジウム等も企画していくことにより更なる展望を描いていきます。

プロジェクト代表者

吉成哲平（大阪大学大学院人間科学研究科特任助教）

プロジェクト構成員（学内）

三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

許 衛東（大阪大学大学院経済学研究科准教授）

高橋慶吉（大阪大学大学院法学研究科教授）

豊田岐聡（大阪大学大学院理学研究科教授）

宮原 暁（大阪大学大学院人文学研究科教授）

プロジェクト構成員（学外）

丸田孝志（広島大学大学院人間社会科学研究科教授）

馬 建（新潟食料農業大学食料産業学部助教）

張 曼青（京都大学フィールド科学教育研究センター特定助教）

岡野翔太（神戸大学大学院人文学研究科助教）

鄒 燦（中国南開大学日本研究院副教授）

江 沛（中国南開大学歴史学院教授）

許 育銘（台湾国立東華大学歴史学系副教授）

柳 鏞泰（韓国ソウル大学校歴史教育科教授）

周 太平（中国内モンゴル大学モンゴル学院教授）

福田州平（香港大学專業進修学院学院助理講師）

許 俊卿（中国清華大学新聞伝播学院研究員）

山口政則（城山小学校被爆校舎平和発信協議会会長）

松尾真一郎（“天空のRAKUGAKI”drawing作家／城山小学校被爆校舎

平和発信協議会会員）

恩河 尚（沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」・沖縄市史編集担当）

伊敷勝美（沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」・沖縄市史編集担当）

次世代への〈Port of Call〉

未来への中継点としての特別資料の継承と活用

中村充孝

(ハワイ大学マノア校図書館日本研究司書)

サブジェクト・ライブラリアン（研究司書）と聞いて、どんな想像をしますか。司書だから図書館でレファレンスデスクに座っている職員！と考える人も多いのではないのでしょうか。日本に帰国するたび私が知恵を絞るのは、この凝り固まった誤解をどうやって解消していくかです。なぜなら私たち研究司書がこのデスクに腰を落ち着けるのは、毎週ほんの数時間でしかないからです。ではライブラリアンは日々何をしているのか。当校のニーズに沿った蔵書コレクションの構築、教授や学生の研究支援、資料の取り寄せ、クラスごとの資料・データベース紹介、北米や日本在住の研究者との各種交渉や協働作業、国際会議・学会への出席と講演等々、枚挙にいとまがありませんが、ハワイ大学マノア校の日本研究司書として職責の中心にあるのは、実は代々引き継がれてきた特別資料の維持・管理となります。

太平洋の直中に位置するハワイ諸島、とりわけオアフ島ホノルル市は東西航路の要衝としてハワイ王国統一直後から発展してきました。19世紀後半から急速な発展を遂げた砂糖プランテーション農園は、アジア各国から労働者（中国人、日本人、フィリピン人）、大西洋から労働者・中間管理職（ポルトガル人）、北米・西欧から資本家・経営層（Haole・白人）の大規模な植民の流れをもたらしました。そして当時のコミュニティの要請に応えるべく1908年に設立されたのがハワイ大学の前身、「ハワイ農工カレッジ」。校内の図書室は当時一万冊程の米政府発行の農業関係資料を所蔵していました。やがて総合大学に発展した当校には独立した建造物としての図書館が設置され、蔵書を増やして行く中で、アジア関連書籍、なかでも日本に関する資料の必要性が認識されるようになります。その声に応えたのが当時ホノルルの日系コミュニティで活躍していた日本出身の指導者達でした。1920年、「日本研究プログラム」の発足にともない招聘された前同志社大学総長、原田助は日本・米国・ハワイの政治・産業界の協



力を得て、日本学の分野で阪巻駿三・上原征生らの後進を育てるとともに、広範な日本学コレクションの構築を進めます。

一方、1907年、日本の皇族として航海の途上ホノルルに寄港した伏見宮貞愛親王は当地で大歓迎を受け、200ドルを日系コミュニティに下賜。その寄付を資源の一部として、それまで使われていた日本国内の教科書の代わりに、ハワイの現状に即した現地化された教科書が作られ、学校で使われるようになりました。当館では「ハワイ日本語学校教科書文庫」として600冊程が保管され、日本語学校図書館に収められていた児童書と共に研究に供されています。現在、同教科書コレクションの展示が準備されており、2025年12月から2026年3月末まで関連資料と併せて公開予定です。とりわけ20世紀前半の歴史の激動期に日系コミュニティがいかに二世の教育に取り組み、その動きがハワイ社会でどのように受け止められたのかに注目しています。民族の米国社会への同化・異化の動きを捉えつつ、日系コミュニティと日本語教育の盛衰について展示し、研究者や次世代の学生の皆さんに考えるきっかけを提供したく考えています。3月末までにハワイ大学を訪問される方はぜひお立ち寄りください。なお貞愛親王の名は一般書架にも残っています。1935年に「伏見宮記念奨学会東洋文庫」としてハワイ州立公共図書館に寄贈された3000冊の書籍は、太平洋戦争の渦中に解体され、その一部が蔵書票付きの書籍として、今日まで当館日本コレクションの一翼を担ってきました。

前出の阪巻駿三は当校の琉球・沖縄研究プログラムの発展に尽力し、その研究成果は、沖縄コレクションの「阪巻ホーレー文庫」として当館特別資料の中でも重要な部分を占めていますが、同時に「薩摩文庫」も残っています。琉球王国研究のためには江戸時代を通して同国の支配者であった薩摩藩の研究が必要と考えた阪巻は、鹿児島大学教授であった原口虎雄の残した2000冊近くの江戸時代の写本を当時まだ珍しかったゼロックスコピーとして入手します。薩摩藩各村の有力家門の蔵に保管されていた、江戸時代の各種古文書は、家族構成や財産目録、そして各地の事件の記録ともなっており、現在同文書のくずし字解読のための最適なデジタル化方針を検討しています。

1954年、日本航空が東京－サンフランシスコ便の運航を開始し、それまでの船旅から人々の移動手段が変わり始めました。しかし当時の航空機の性能上、途中給油が必須であったため、ハワイは1970年代まで引き続き旅客の経由地としての役割を担います。その時期に当地に滞在したのが作家、川端康成でした。日本人として初のノーベル文学賞を受賞後、当校の客員教授として数か月ホノルルに留まり、当時の講演記録を残しています。滞在中の講義の参考にしたと思われる、源氏物語を中心とした日本古典文学関係の書籍は、後に図書館に寄贈され「川端文庫」として保管されています。大学図書館では大抵所蔵されている有名な研究書が大半ですが、ところどころに川端氏の書き込みが残されており、講義を準備する際の同氏の意気込みが伝わってきます。

作家の書齋が当館に移されたコレクションもあります。1975年、旅先の香港で客死した人気作家、梶山季之の蔵書7000冊余りが美那江夫人の手により寄贈され、当館特別資料「梶山文庫」として研究に供されています。日本統治下の京城（現ソウル）にて、広島出身の朝鮮総督府技官の父とハワイ出身の母の間に生まれた梶山は、生涯を掛けて「民族の血とは何か」を追究続けました。通俗小説家として見られがちな梶山ですが、彼の残した蔵書群からはその真摯な生き様がありありと浮かび上がります。なお梶山文庫については、近日発刊予定の『書物學』（勉誠社）に拙文を寄稿しましたので、興味のある方はこちらでもご覧いただけますと幸いです。

上記梶山文庫が遠くハワイまで運ばれたのは、実は前述の「通俗作家」と無関係ではありません。当時の梶山は作家として毎年高額納税者ランキング上位に名が挙がる程の売れっ子でしたが、その作品の多くは学術研究の対象とは見なされておりませんでした。そのため同氏の名を冠したコレクションの受け入れは、当時の日本国内

の研究機関には難しいものがあつたとのこと。梶山の蔵書群の価値を機敏に察知した当学教授の熱意と梶山の実母のハワイとの繋がりが、当館への寄贈の決め手となりました。

同じく日本国内に留まらなかったのが「高沢文庫」です。ジャーナリストの高沢皓司は、自らも新左翼運動に参加しながら、反安保・反ベトナム戦争・反公害・反原発運動等々、様々な学生運動、市民運動に関する一次資料を収集。その資料群は数々の出版物や雑誌記事と共に当館に残されています。晩年はオウム真理教の活動も追い、核関連施設の取材のためウクライナも訪問したことが、取材記録ファイルにまとめられています。こういった個人情報や機密情報を含む資料を、将来的にどこまでデジタル化も含めて公開していくか。担当司書として常に最適解を探し続けています。

デジタル化の話が出たところで、最後に「山田奈々子口絵コレクション」をご紹介します。明治大正期の人気文芸誌『文藝倶楽部』の巻頭を飾ったのは当時の新進気鋭の絵師達の手による木版画でした。西洋的な「小説」を日本国内の一般読者、特に家庭の女性向けに発刊した同誌は、それまで読み物に不慣れであった新たな読者層を開拓するため、小説の世界観を一枚の絵で表現し、読者を物語へと誘いました。口絵研究家である山田氏より寄贈を受けた数百点の口絵と文芸誌は順次デジタル化され、上記のサイトにて対応する作品の簡単なシノプシスと共に掲載されます（作業完了は2026年中を予定）。

デジタルアーカイブ構築には館内の調整はもとより、著作権・契約に関する作業等、対外的にも様々な調整を求められます。上述の各種業務は、私が現職に着任してこの2年半の間に行って来た職務の一端ですが、休む間もなく働いても手が回らないのが実情です。それと同時にこれらの一つ一つが、司書である私にとってかけがえのない学びの機会となってきました。そこで今後この業務の協働作業を通して後進のトレーニングを行うべく「日本研究司書養成プログラム」を立ち上げました。来年から毎年、9か月の期間で北米の図書館修士号取得者一名を雇用し、日本研究司書として他大学のポジションに応募出来る人材を育てていく計画です（2026年1～2月には募集要綱を発表予定）。同プログラムの実現を可能にくださった方々にこの場をお借りして感謝を申し上げるとともに、キャリアとしてサブジェクト・ライブラリアンに興味を持つ次世代の皆様のお応募をお待ちしております。

参考文献

バゼル山本登紀子「『東西の十字路』楽園ハワイの中の古典籍とその来歴：ハワイ大学マノア校図書館アジアコレクション部日本文庫から」『書物學』18、「蔵書はめぐる：海外図書館の日本古典籍コレクション」、2020年、11-19

教育プログラム

大阪大学では、専門的な「知の探究」のみならず、「知と知の融合」「社会と知の統合」を促すため、「学際融合・社会連携を指向した双翼型大学院教育システム」(Double-Wing Academic Architecture: 通称DWAA)を導入しています(<https://itgp.osaka-u.ac.jp/systems/dwaa/>)。諸部局を横断する組織としての本拠点は、このシステムに基づいて、「大学院等高度副プログラム」「人文社会科学系オーナー大学院プログラム」に、「知と知の融合」「社会と知の統合」を促す横断型の教育ユニットを提供しています。

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」

プログラム紹介

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」(英語名 Global Japanese Studies 以下、GJSプログラム)は、日本研究の最先端の成果を学際的に学ぶとともに、そのコンテンツを英語で発信するためのスキルを高めることを意図して2017年に開講した教育プログラムです。現在、人文・社会科学系部局の協力のもと、グローバル日本学教育研究拠点により企画・運営されており、文系・理系を問わず、日本研究の最先端を学び世界に発信したい大学院生を対象としています。以下の3つの到達目標に対応する形で、科目が構成されています。



プログラムの到達目標 (修了時に身に付く能力)

- ① 複数の分野の日本研究の最新の成果を理解している。
- ② 海外の日本研究の最新の動向を踏まえて議論することができる。
- ③ 日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身に付けている。

①の目標に対応して提供されているのは、日本の日本研究の最先端の成果を日本語で講じる講義科目で、②③の目標に対応して提供されているのは、英語圏の日本研究の最新の成果を学ぶ講義科目と、自分の研究成果を英語で発信する力を高めるための演習科目です。

受講生からのメッセージ

LI, Kris Chung Tai

言語文化研究科言語社会専攻 博士後期課程3年

私は香港における日本文化の伝播を研究していますが、このような関心が Global Japanese Studies (GJS) プログラムの目標と合致しています。このプログラムを履修するなかで、各文化に固有で翻訳しがたい概念がいかに訳され、その過程を通じて他国における日本像がどのように変容するのかという問題に触れる機会を得ました。さらに、GJSは英語圏のアカデミアで活躍するのに必要なスキルを身につけるためのコースを幅広く提供しており、そのおかげで英語力のみならず英語で考える力も一層高めることができ、よりグローバルな舞台に挑む自信を得ました。私の専攻は日本研究ではありませんが、GJSの講義や演習から得た学びを自専攻の知見と照らし合わせることで、多角的な思考がいつそう刺激され、自身の研究にも大いに役立っています。

上野一志

経済学研究科経済学専攻 経済史・経営史コース 博士前期課程1年

GJSの特徴を端的に言えば、「日本という国民国家の境界」を問うことにあります。教員陣が日系移民や引き揚げ研究者によって占められ、「沖縄」や「人種」、「植民地」、「ジェンダー」など日本の「国民国家形成」の深淵に切り込むトピックスが用意されています。「引き揚げ」と「ニュータウン」がファミリーヒストリーの根幹である私にとっては常に刺激的な授業でした。観光立国が叫ばれ、「京都」や「神社」が「伝統」として想像される2020年代において、19世紀以来の西洋近代の受容と、20世紀の経済成長による摩擦とひずみを振り返ることは何人にとっても有益な営みだと思います。究極、国民国家建設とは「国民」と「非国民」を区別することにほかありません。その行為は暴力的で常に曖昧さをはらんでいます。その境界における慟哭とダイナミズムに迫ること、それがGJSの魅力ではないでしょうか。

授業担当教員からのメッセージ



Nicholas LAMBRECHT

人文学研究科准教授
グローバル日本学教育研究拠点 (グローバル拠点形成部門) 兼任教員

担当科目

Introduction to Contemporary Japanese Studies 1: "Interacting with Japanese Culture"
Introduction to Contemporary Japanese Studies 2: "The Japanese Short Story"
Advanced Academic Skills for Humanities 1: "Writing Research Papers"
Advanced Academic Skills for Humanities 2: "Presenting Research"
Issues in Contemporary Japanese Studies 1: "The Practice of Translating Japanese Media"
Issues in Contemporary Japanese Studies 2: "Postwar Repatriation in Literature, Art, and History"

大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の開始からそろそろ10年、私が関わり始めてからまもなく7年になりますが、日々、多くの学生のキャリア形成に大きく寄与している教育プログラムだと実感しています。科目を継続的に提供するなか、受講者数が年々増加していることから、今年度は英語科目を一段と拡充しました。「Writing Research Papers」の科目では、一人一人の学生が十分なフィードバックの受けられる環境を作るため、博士前期課程と博士後期課程の学生を2コマに分けるといった新たな体制を今年度から導入しました。これにより、修士論文執筆中の学生と博士論文執筆中の学生、それぞれのニーズに特化した内容を提供することができました。また、私が担当するGJS科目の中で特に専門性の高い「Postwar Repatriation in Literature, Art, and History」を4年ぶりに開講しました。特殊なテーマにもかかわらず多くの学生が受講し、毎週のディスカッションに積極的に参加しました。これを踏まえ、今後もGJSプログラムの中で、このような専門性の高い特殊講義・特殊演習科目を継続的に提供していきたいと思っています。



Facundo GARASINO

グローバル日本学教育研究拠点 (グローバル拠点形成部門) 特任講師

担当科目

Introduction to Contemporary Japanese Studies 1: "Japan and Global History"
Introduction to Contemporary Japanese Studies 2: "Historicizing Japanese Studies in English"
Basic Academic Skills for Humanities 1 & 2: "Reading for Discussion"

今年は、英語によるアカデミック・スキルの基礎を養う授業を続けながら、グローバルな視点と方法に立つ日本研究を全体的に見通すような講義科目を新たに開講しました。こういった科目を通して、受講者の学びの深化と視座の多様化に貢献した手応えを感じました。「Basic Academic Skills」では、日本社会を取り巻く現代的課題を取り上げつつ、論理的な構造と適切な根拠に基づいた議論をアカデミックな場で行うためのトレーニングを行いました。そこではただ単に英語によるディスカッション・スキルを磨くだけでなく、自らの関心事項を整理したり、あるいは再発見したりする機会が多くありました。そして講義科目「Introduction to Contemporary Japanese Studies」では、それぞれ空間軸と時間軸に沿ってグローバルな日本研究のひとつの全体像を提供しました。「Japan and Global History」では、帝国・移民・科学や技術、作物の流通や環境史などに関する最新の英語論文を読みつつ、ヨーロッパ、東南アジア、太平洋地域やラテンアメリカとの交差点から近代日本の歴史について議論を重ねました。さらに「Historicizing Japanese Studies in English」では、19世紀末から2010年代にかけての日本研究の代表的な著作を中心に、時代とともに変化する英語による日本研究の関心、方法論や視点の変化を追いました。こういった講義科目の中でも、受講者の専攻分野や研究課題をグローバルな視点から捉えなおすような議論を展開できたことが重要な成果でした。今後とも、学生による研究成果の国際的発信に必要なスキルと視座の獲得につながる科目の一層の充実に貢献していきたいと思っています。

大学院等高度副プログラム「デジタルヒューマニティーズ」

令和7年度の大学院等高度副プログラム「デジタルヒューマニティーズ」は、人文学研究科（人文学林・言語文化学専攻）を幹事部局とし、グローバル日本学教育研究拠点の協力を得て実施しています。まず、人文学林の開講科目「デジタルヒューマニティーズ基礎」（豊中、箕面の両キャンパスで2コマ開講）、「デジタルヒューマニティーズ演習」（秋学期）に加え、今年度からは、新科目「人文学とデジタル技術」（春～夏学期および秋～冬学期にメディア科目として実施）を構成科目に加えました。この科目では、デジタル技術を受講学生が自身の研究において利活用する力を涵養し、個々の研究テーマを実践的なデジタルスキルによって深化・進化させる端緒とすることを意図しています。さらに、言語文化学専攻の専門科目「デジタルヒューマニティーズ（テキスト分析論）A・B」、「デジタルヒューマニティーズ（言語処理と情報検索）A・B」、「デジタルヒューマニティーズ（データ解析）B」を核に、関連科目である史的言語研究A・B（いずれも言語文化学専攻）、行動統計科学特講I（人間科学研究科）、法政情報処理（法学研究科）、テキストマイニング論【旧科目名：知識・情報マネジメント】（経済学研究科）、特殊講義（Social Science Research Methods）（国際公共政策研究科）など、提供科目は人文・社会科学系に広くまたがり計15科目にのびます。なお、言語統計学A・Bは、教員異動により今年度は不開講となりましたが、次年度から再び開講を予定しています。

デジタルヒューマニティーズは、伝統的な人文学（ヒューマニティーズ）とデジタルとの有機的な結合により、人類知の取得、解釈、比較、参照、表現の方法などの再構成に取り組む分野横断的な研究・教育領域です。本プログラムは実証主義的なフィロロジー、言語研究、そして情報学の知見や技術・方法論を応用した言語や文化研究を基盤として学修するのに加え、文字や紙媒体だけでは不可能な史資料の理解やテキストの読み、エビデンスの可視化（visualization）、独創的なリサーチエスションの創成、そして方法論的共有地（methodological commons）に基づく協働（interoperability & collaboration）などを通して、人文知の新地平を切り開く取り組みであると言えるでしょう。テキストや史資料に最新の解析技術を応用することにより、従来のリニアなアプローチだけでは不可能な現象の把握や価値の発見、エビデンスの蓄積という営みを通して、人文学データに新たな光を当てて読みなおすこと、そしてそのような知見と洞察力を備えた次世代の研究者の育成を当プログラムは目指しています。

田畑智司（言語文化学専攻・グローバル日本学教育研究拠点デジタル日本学部門兼任）

授業担当教員からのメッセージ



吉賀夏子
人文学研究科人文学林准教授

担当科目
デジタルヒューマニティーズ基礎
デジタルヒューマニティーズ演習

今年度は大学院生を対象に「DH基礎」「DH演習」を担当しました。当初、多くの受講生が急速に普及するAIやデジタル技術に対し、敷居の高さや無機質さへの戸惑いを感じていたのが印象的です。そうした学生に対し、AIが社会の隅々まで浸透するこれからの時代においてこそ、人間らしい批判的思考を問いつける人文学の知見が不可欠であることを、理屈ではなく「体感」として伝えることに最も苦心しました。授業では、データベースや生成AIに加え、IIIF画像やTEIなどのテキスト分析用データを実際に操作しながら、技術と人文学の接点について活発な議論を重ねました。学生たちは、「デジタルは小難しい」という心理的障壁と格闘しながらも、自らの手でデータを動かすことで得られる知的な興奮や、異分野の視点が交差する瞬間を感じてくれました。技術への戸惑いを共有しつつ、それを乗り越えて自身の立ち位置を再考し、次代の研究者が担うべき役割を前向きに模索した、非常に実りある一年となりました。



DH基礎（春夏）の「エア共同研究」発表会

受講生からのメッセージ

KANG Kiwon

人間科学研究科科学哲学・分析哲学研究室博士後期課程3年

学問における分野の厳密な壁が崩れかけているご時世とはいえ、意識的に足を運ばないといつまでも同じ方法にとらわれることは、既に多くの院生が経験されているかもしれません。私もその一人として、生成AIの普遍化を始めとする研究環境の劇的な変化に追い付いていくべく、DH（デジタルヒューマニティーズ）を基礎から学ぶことに挑戦しました。

本講義は「基礎」を掲げている通り初心者でも分かりやすい上に、豪華とも言える構成が特徴です。シラバスが示す通り、AI、自然言語処理、GIS、IIIF（画像共有）など、DHの多様なトピックについて、その分野の第一線で活躍する研究者がゲスト講師として登壇されます。教科書的な知識だけでなく、現場の貴重な生の声を聞けるのは、この授業ならではの魅力だと思います。また、座学に留まらず、受講生同士のディスカッションも設けられており、互いに協力しながら理解を深めることもできます。最終課題の学生プロジェクト発表では、専門の異なるメンバーと協同し、一人では思いつかないようなアイデアを出し合う体験ができ、非常に刺激的でした。

大阪大学は既に学際的な取り組みに力を入れていることで名高いですが、多くの院生が専門外に触れることを躊躇しがちなのも事実だと思います。受講を迷われている方には、ぜひ履修されることを強くおすすめします。

石井 綾

人文学研究科日本学専攻博士前期課程1年

DH関連の授業が開講されることは、春の説明会で知りました。これまでにデジタル分野についてあまり学んでこなかった私にとって、新たな学びを得られる良い機会であると感じ、関心を持ちました。特に、DH基礎の授業は前提知識が必要ではないとのことでしたので、デジタル分野について学び始めるには最適であると考え、この授業を受講することにしました。

授業は実践を伴って知識を得るもので、大変有意義で何より楽しかったです。数多くの最先端技術の存在そのものや仕組みについて、外部の先生方からも教えていただけたのは貴重だったと感じています。加えて、実際にシステムを使ってみることで授業の理解度も向上しました。また、研究にデジタル技術をどう活かせるかについて発表するグループワークも印象的でした。自分で先行研究を調査したり、多様な研究を行っているメンバーと話し合ったりすることを通して、デジタル技術が人文学研究の幅を広げることを実感しました。

今は、他のDH関連の講義へ興味が出てきたり、自分の研究に対してデジタル技術をどのように活かせるのかという観点から考えられるようになっており、この授業を受けて良かったと考えています。

劉 津芸

人文学研究科言語文化学専攻博士前期課程1年

大阪大学人文学研究科の強みの一つは、伝統的な人文学とともに、情報科学やデータ分析技術を体系的に学べる点にあると考えています。受講前は「デジタル」という言葉に敷居の高さを感じていましたが、実際の講義は非常に体系的かつ丁寧で、すぐにその奥深さと魅力に引き込まれました。

前期の講義では、形態素解析やコーパス構築のほか、AI-OCRによる資料のデジタル化、Linked Dataを用いたデータの動的可視化など、多様なアプローチをハンズオンで学びました。手法の存在を知らなければ、自身の研究への応用も想起できません。本講義での体験は、これまで見えてこなかった新たな研究の可能性を拓き、私の視野を大きく広げてくれました。

さらに、第一線の研究者の方々との対話の機会は、課題設定の精度と展望を押し広げ、何より「手法を知ることによって解ける課題が見えてくる」という逆向きの思考を身につけられました。

最終発表では、各アプローチの実装手順と導入効果をチームで検討し、議論と相互の指摘、文献探索によって見落としていた論点が明確化されました。このプロセスを通じて研究の視野が広げられ、作業効率の向上にもつながったと実感しています。今後は、本講義で得たこの新たな視野を活かし、実証的な成果へ結びつけていきたいと考えています。

人文社会科学系オナー大学院プログラム「グローバル日本学ユニット」

ユニット紹介

大阪大学大学院人文社会科学系オナー大学院プログラムは2024年度4月に開設されました。人文社会科学系部局の連携のもとに運営される知のジムナスティックスプログラムの1つです。所属する研究科での専門の学びと並行して、専門とは異なる人文社会科学の知見や、社会の様々な現場などで学べるカリキュラムが提供されています。オナー大学院生同士の研究科を超えた交流や、フィールド等への旅費支援のある授業なども用意されています (<https://www.hsshonor.osaka-u.ac.jp/program>)。

2024年度はグローバル日本学ユニットが設置され、最初の履修生を受け入れました。日本の人文・社会科学の最大の強みは、日本の言語・文化・社会などについての幅広く奥深い学術知が蓄積されている点です。大阪大学においては、この学術知を専門的に掘り下げる営みは、各研究科において、ディシプリン・ベースで行われています。その成果を踏まえつつ、本ユニットにおいては、この学術知の展開を、学際的に総合する方向、および、社会との統合を図る方向で促し、現代日本社会という現場において実践知を醸成します。また、並行して、外国語やデジタルの手法による研究発信力の強化を図り、日本という事例について深い理解を有しているだけでなく、日本から新たな研究の展望を発信することのできるスキルと創意をそなえたグローバル人材を育成します。

学際的な総合、社会との統合、研究発信力の強化が、本ユニットのキーワードです。



プログラムの概要 [構成科目]

導入科目 (「グローバル日本学への招待」)

導入科目 (「グローバル日本学への招待」): 日本学の新たな展開に受講者を導入するための必修科目です。本ユニットが構築された学術的背景を解説したうえで、人文・社会科学系の各部局の日本研究者がそれぞれのディシプリンを基盤としながら学際的・先端的問題提起を行います。あわせて、国際的研究発信力強化の意欲を高めるためのセッションを設けています。

基盤教養科目

学際的・国際的視野に立ち、先端的な課題意識に基づいて、日本の言語・文化・社会についての理解を深め、本ユニットの基盤となる知識を獲得・共有するための科目です。

アカデミックスキル・方法論科目

外国語やデジタルの手法によるアカデミックスキル、あるいは、各ディシプリンの高度な研究方法を磨くことにより、研究(発信)力の高度化を図ります。

フィールド・実践科目

フィールドでの学び、社会との関わりの中での学びを通じて、日本をめぐる学術知の社会学連携的展開、実践知の醸成を促すための科目です。

国際学術研修科目 (「国際学術研修」)

本ユニットの履修者が、国際的な学術会議において、学びの成果を母語以外の言語で発信する営みを積極的に支援するための科目です。所定の条件を満たすことにより単位として認定されます。



人文社会科学系オナー大学院プログラム
令和7年度 第2回交流会の様子
本ユニットの2期生が研究発表を行いました。

授業担当教員からのメッセージ



Facundo GARASINO

グローバル日本学教育研究拠点
(グローバル拠点形成部門) 特任講師

担当科目

グローバル日本学への招待
国際学術研修

本ユニットが動き出してから2年目となった今年、通年科目「国際学術研修」を初めて実施し、履修者の学びと研究活動に対する支援体制の整備と強化に取り組みました。この科目では、履修者が自らの研究課題と活動を国際的に展開できるようにサポートすることを目標としています。その具体的な取り組みの一環として、この科目の履修者に対する支援制度を設けて、日本国内外で開催された国際学会での研究発表と国際的なジャーナルへの論文投稿を支援しています。その際、ただ単に旅費などを支給するのではなく、申請書類を通して当該の研究発表や投稿が自身の研究の国際的展開にどのように貢献するかを履修者に説明していただくとともに、日程作成や旅費計算などもしていただきました。その過程で、一見するとありふれた事務的作業に思われるこうした書類作成も、競争的資金の獲得にかかわる研究者として必要なスキルであることに改めて気づかされました。今後も、履修者の研究力の高度化に資するような支援体制のさらなる強化を図っていきます。

「グローバル日本学への招待」を終えて

本ユニットの導入科目である「グローバル日本学への招待」では、履修者が自らの研究について、日本研究のグローバルな文脈における位置づけや現代日本社会における意義を説明できる力を養うことを、学習目標のひとつとしています。これを達成するべく、2025年には、グローバル日本学教育研究拠点の教員やゲスト教員による講義の実施にとりわけ注力しました。これらの講義を通して「グローバル日本学」の現状と課題、ならびに今後の展望を学ぶことにより、各履修者の研究の高度化を図りました。

その一環として、吉賀夏子先生(人文学研究科人文学林)には、「デジタルヒューマニティーズの世界によるこそ:人文知と情報学の交差点で何ができるか」と題する講義を実施していただきました。そこで吉賀先生は、デジタル技術が人類の思考プロセスと現代社会にもたらす変化に着目しつつ、自らが構築に携わってこられた「小城藩日記データベース」(佐賀大学地域学歴史文化研究センター)の事例を軸に、人文学におけるデジタルヒューマニティーズの今日的役割、可能性と今後の課題について解説されました。これを機に、履修者が各自の専門分野におけるデジタル技術のインパクトを改めて認識しつつ、自らの研究課題に資するデジタルな手法の可能性について考えたことは、貴重な成果でした。

本ユニットでは、各分野の最先端の研究手法と研究成果に触れることにより、「グローバル日本学」の新たな展開をもたらすような博士論文の完成に向けて、履修者を今後ともサポートしていく所存です。



吉賀夏子先生にご担当いただいた「グローバル日本学への招待」の一コマ「デジタルヒューマニティーズの世界によるこそ:人文知と情報学の交差点で何ができるか」



国際シンポジウム

Globalizing Japanese Studies in the Age of the Rising Global South

【開催報告】

2025年12月13日〔土〕に、「Globalizing Japanese Studies in the Age of the Rising Global South」を、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点と大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「Learning from and Promoting the African Association for Japanese Studies」との共催で開催しました。開催場所は、大阪大学箕面キャンパス外国学研究講義棟1階外大記念ホールで、オンラインでの配信と併せてハイブリッド形式で行いました。参加人数は151名（うち体面参加が34名）でした。



Globalizing Japanese Studies in the Age of the Rising Global South

2025年12月13日（土） 13:30~16:45
場所：大阪大学箕面キャンパス外国学研究講義棟1階外大記念ホール+オンライン

【主催】
大阪大学グローバル日本学教育研究拠点

【共催】
大阪大学グローバル日本学教育研究拠点 拠点形成プロジェクト
Learning from and Promoting the African Association for Japanese Studies（代表 ガデミアミン准教授）

Program

13:30-13:50
 拠点長挨拶 宮本陽一（大阪大学理事・副学長／大阪大学グローバル日本学教育研究拠点長）
 趣旨説明 宇野田尚哉（大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・副拠点長）
 司会= ガデミアミン（大阪大学大学院人文学研究科准教授）

13:50-15:20
 講演
講演1 アデドゥイン・アグオル（イバダン大学教授／アフリカ日本学会会長）
 Japan-Africa Relations: New Horizons, Challenges, and the Role of the African Association for Japanese Studies

講演2 エルハディディ・アブデルラフマーン（カイロ大学専任講師）
 中東における日本語教育：エジプトを中心に

講演3 松原モラレス礼子（サンパウロ大学准教授）
 ブラジルの日本研究動向：サンパウロ大学を中心に

15:20-15:30 〈休憩〉

15:30-16:40
 討論

ディスカッサント
 ファクンド ガラシーノ（大阪大学グローバル日本学教育研究拠点特任講師）
 福田義昭（大阪大学大学院人文学研究科准教授）
 安部麻矢（大阪大学マルチリンガル教育センター特任講師）

16:40-16:45
 閉会の挨拶



日時：2025年12月13日〔土〕 13:30-16:45
 会場：大阪大学箕面キャンパス
 外国学研究講義棟1階外大記念ホール
 （ハイブリッド開催）
 使用言語：第1部・第2部
 日英両語（日英同時通訳あり）

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
 共催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
 拠点形成プロジェクト
 Learning from and Promoting
 the African Association for Japanese Studies



開催報告

宇野田尚哉 (大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・副拠点長)

「国際日本研究」や「グローバル日本学」が語られるようになって、およそ10年が経ちました。この間に、日本の日本研究と海外の日本研究との連携は、格段に強化されました。2017年に正式発足した「国際日本研究」コンソーシアムに国内25機関・海外62機関が参加するに至っている点はその端的な証左ですが、大阪大学のグローバル日本学教育研究拠点もそのような動向のなかで中核的な役割を果たしてきました。

このような連携強化は、アジア研究・日本研究の確固とした国際的学術組織がすでに存在している地域、すなわち、北米、欧州、東アジアなどに所在する諸機関との関係を中心に進められてきました。現時点では、その成果を踏まえつつ、より広い地域、すなわち、「グローバル・サウス」の日本研究機関との連携強化が、喫緊の課題となっています。

「グローバル・サウス」は、政治的・経済的含意において用いられることの多い言葉ですが、本シンポジウムでは、そのような含意を踏まえつつも、近い将来に日本研究が全面的に展開されることが期待される地域、という意味で使用しました。今回、具体的には、アフリカ、中東、ラテンアメリカの、中核的日本研究組織・機関から登壇者をお招きし、それぞれの地域・それぞれの国における日本研究の関心の所在や将来の展望についてお話しいただきました。これを通して、それぞれの背景や特徴を理解したうえで連携するきっかけを、大阪の地において創り出すことを目指しました。

ところで、「グローバル・サウス」においては、日本においてはとは反対に、人口が急速に増加しつつあります。少し長い目で見れば、日本語・日本文化の学習者、そして日本研究に従事する研究者が増加する最も大きなポテンシャルは、ここにあるといつてよいでしょう。そのようなポテンシャルを秘めた人びとの知的関心において、「日本」が後景に退いてしまうことのないようにするためには、それぞれの地域の中核的日本研究組織・機関と日本の日本研究機関が相互理解を深め連携を強化し、両者の連携のもと日本研究のプレゼンスを高めていくことが不可欠であると考えます。そして、そのような新たな連携の強化は、日本における日本研究をもより豊かなものにしていくはずだと考えます。

今回の国際シンポジウムでは、20～30年先を見据えつつ、各地域からお招きした登壇者の先生方とともに、「グローバル日本学」の未来を展望するような議論を展開することが出来ました。

Japan-Africa Relations: New Horizons, Challenges, and the Role of the African Association for Japanese Studies

Adedoyin AGUORU

(University of Ibadan, Professor; African Association for Japanese Studies, President)



Japan-African relations since the earliest times till date is the concern of my presentation, which engages the experiences which have defined Japan as a nation and also defined the joint experiences of the fifty-four nations that make the African continent.

These experiences, and the resilience with which these nations have remained strategically positioned in global politics and in the international community make up the crux of the engagement of the African Association for Japanese Studies in Africa. Having been colonised largely by the West, I purposively began to take interest in the East, particularly Japan post-World War II, to see how countries outside of Europe and the Americas that Africa related closely with pre and post-colonialism deconstruct their world. This presentation explicates, among other things, the significance of activities of the African Association for Japanese Studies in fostering mutual understanding between Japan and the African continent since the inception of the Association in 2017 till date. The significance of the recognition and commendation it has earned from the Japanese government through its Embassy in the Federal Republic of Nigeria, the intellectual and academic contributions to scholarship in Nigeria and in Japan as well as institutional collaborations impacting trade and industry and the future prospects are also elaborated upon. It concludes on concerns on contemporary perceptions of Japan about Africa that requires deconstruction and reconstruction for the potential diplomatic symbiotic relationship that relating with Africa offers.

中東における日本語教育：エジプトを中心に

エルハディディ・アブデルラフマーン (カイロ大学専任講師)

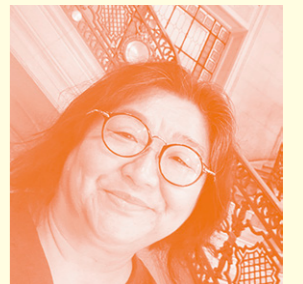


第4次中東戦争に伴うオイルショックを契機として、中東・アフリカで初となる日本語学科が、エジプトのカイロ大学に設置された。この出来事は中東地域における日本語教育発展の端緒となり、その後は多くの国で日本語コースが設けられ、第二外国語として日本語を学べる環境が整えられていった。なかでもカイロ大学の日本語学科は、中東における日本語学科開設の推進役を果たしており、その卒業生は、サウジアラビアのキングサウド大学 (1994年) やイラクのバグダッド大学における日本語学科設立に重要な役割を担った点が注目される。

さらに、同学科にはアラブ諸国をはじめ、日本に関心を持つ中東地域の学生が入学し、日本語を専門的に学ぶ学習者層が形成されている。現在では大学院も併設され、同学科出身の研究者・教師がエジプト国内外で日本語教育・日本研究に携わっているほか、日本語、日本思想、日本文学などを対象とする国際学会も開催されるなど、中東における日本語研究の中心的拠点として発展を続けている。

ブラジルの日本研究動向：サンパウロ大学を中心に

松原モラレス礼子 (サンパウロ大学准教授)



本報告はサンパウロ大学における文学部・東洋学科の日本語講座について、過去と近年の大学院と学部の研究動向を概観すると共に、いかにブラジルという文脈で日本研究を維持・継続できるかを考えるものである。同学部は1964年に設立、大学院は1996年で、来年で30周年を迎えることになる。大学院は、ブラジル高等教育支援・評価機構 (CAPES) がブラジル全国にある大学院 (修士・博士) のプログラムを評価し、研究を促進し、奨学金を決定して、全体の質の向上を管理している。評価の一環として、以前は論文の数や研究者養成、卒業後の進路のフォローなどが主な評価基準であったのに対して、最近ではアカデミアの枠を超えた、一般人に対する科学の波及効果やエクステンション型イベントのインパクト、基礎教育における大学の貢献度、国際化などが重要視されていることが挙げられる。ブラジルの研究は南西 (サンパウロ、リオ、ミナス、パラナ州の大学) に集中していることの是正を図ったブラジル連邦政府は、北部や東北部、中東地方などの教員や大学院プログラムが優遇される措置がいくつか設けられている。日本研究に特化した大学院としてスタートして本大学院は初年度に比べると研究の対象や内容、研究生自身のプロフィールが変容、年々非日系の方が人文科学の研究に増加していることがわかる。研究内容も伝統的な国語学・日本文学から最近では漫画・アニメをはじめとするポップカルチャー、日本語教育、移民研究などと増えてきている。

グローバル・サウスという言葉が含む問題の中に、やはり貧富の差があるだろう。ブラジルの場合、南米全体の類似点として、教育の差異が一つの問題として出てくる。それは、最近ではインクルージョンと所属意識を基軸に考える方針でマンモス大学のサンパウロ大学においても、黒人、褐色系、先住民への補正措置として割当制度が設けられるようになった。黒人や先住民であることは自己申告をし、高校の全課程を公立で勉強した者には大学に入れる枠が今年で50%まで伸びている。また、門を開けるだけでなく、入学後も学力不振でドロップアウトにならないように、未然に防ぐ対策として補助金の制度も設けられ、食事や宿泊の補助がされるようになっている。言語も母語を含め、研究に不可欠な諸外国語もブルデューの言う文化資本であり、研究へのアクセスとしていかに民主的に全ての学生の手渡すかなど考えるのである。日本の文部省からも留学する機会も与えられてあるが、この「日本研究」というマイナーな立場から、しかもグローバル・サウスに属するブラジルで、いかに今後の日本研究の進展に貢献できるかを考えるのである。

国際シンポジウムを終えて

Facundo GARASINO

(Specially Appointed Lecturer, the University of Osaka Global Japanese Studies Education and Research Incubator)

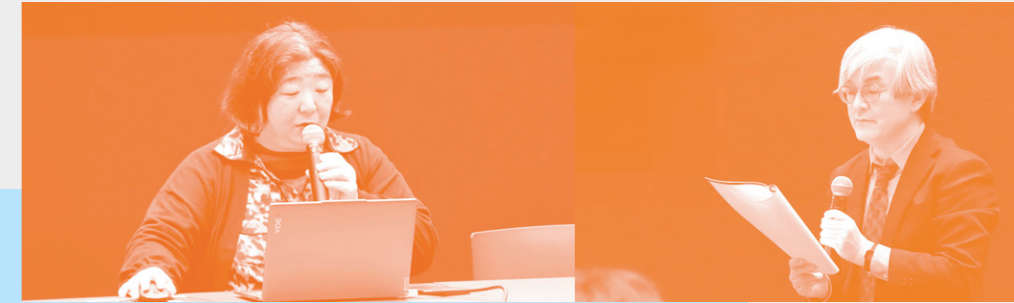
What are the historical contexts and particularities of Japanese studies in countries like Nigeria, Egypt, or Brazil? What possibilities, challenges, and new perspectives can the field offer in Africa, the Middle East, or Latin America? How can institutions and researchers in Japan cooperate with colleagues in these regions? What can Japanese studies in Japan learn from their endeavors? These are some of the questions we have addressed at this international symposium.

In discussing these questions, a primary issue arose concerning the scope, effectiveness, and limitations of the concept of the Global South. Like any comprehensive concept, it facilitates dialogue between different contexts while carrying the risk of overlooking specific problems in each region or locality. On the one hand, the Global South, as a geopolitical rather than a geographic category, allows for problematizing common issues among societies that share historical experiences and ongoing legacies of imperialism and colonial rule. In this symposium, this framework enabled us to debate the common legacies of Eurocentrism in shaping academic curricula and institutional practices that consider Japanese studies as minor and peripheral compared to European languages and research fields. In this regard, Japanese studies from the Global South can help Japan-based researchers and institutions to develop methodological and theoretical frameworks critical of the geopolitics of knowledge.

At the same time, important differences arose around the specific context and challenges of Japanese studies in each region. For instance, while using English as the primary language of academic communication has helped scholars in Nigeria to meaningfully connect with colleagues from multiple fields in Africa and Japan, Japanese studies in Egypt and Brazil have historically developed around the teaching of the Japanese language. In this situation, expanding English-based research projects and symposia is crucial for establishing new collaborative networks with colleagues in Africa, but it may be problematic and even detrimental in the context of Brazil, where Japanese language programs are struggling to obtain adequate institutional support despite strong needs in the humanities and sciences. Therefore, Japan-based scholars seeking to collaborate with the Global South must adopt different strategies and frameworks to engage with the challenges of diverse regions and institutions.

Other important issues, however, remain to be considered for future endeavors. These include problems of positionality and the institutional, economic, and geopolitical implications of promoting Japanese studies from Japan. Failing to do so presents the risk of building mechanisms of academic extractivism, drawing resources and people from the Global South to serve the interests of the Global North under the banner of Global Japanese Studies. Thus, future endeavors should always consider what concrete measures institutions in Japan can take to strengthen Japanese studies in each region, and identify strategic topics and disciplines for developing joint research projects and collaborative educational programs. Another intriguing question is how to rethink the intricate relationship between Japan and Asia within the framework of collaboration with the Global South. In this regard, insights on historical and ongoing legacies of colonialism and imperialism that may emerge from the Global South have the potential to open up alternative decolonial perspectives for reconsidering Asia in Global Japanese Studies.

The rapid demographic and economic growth of countries in the Global South, and their growing geopolitical influence and political assertiveness, as evidenced by the emergence of the BRICS, will bring significant changes to international academic practices. However, as discussed in the symposium, awareness in Japan regarding Latin America, Africa, and the Middle East still lags behind the rising global relevance of these regions and Japan's long-standing historical ties with them. For instance, Japan has been connected to Latin America through more than a century of migration, which has facilitated deep diplomatic, economic, and cultural exchanges, including contemporary immigration from Brazil and Peru to Japan. Nevertheless, this transnational history and multicultural present are underrepresented in Japanese institutions, public discourses, and academic production. In this context, the discussions in this symposium provided a first step in joint attempts to decenter the traditional flows of knowledge from North to South into a more equitable relationship, in which subjects in the South are also agents of knowledge production, and to decolonize the epistemological and institutional frameworks of Japanese Studies.



ご参加いただいた先生より

杉山欣也

金沢大学国際基幹教育院教授

日本の大学に「国際化×日本学」式の名称をもつ組織が増えた。学部・学科・副専攻など教育カリキュラムと研究センターとに大別され、文系領域を席卷していると言ってよい。かくいう私の所属大学にもグローバル文化・社会研究センターがある。

これらは大学が音頭をとって立ち上げられているが、本シンポジウムでは大学に関わるものと学会に関わるものの両方が紹介された。カイロ大学が核となって日本語教育拠点を展開したエジプトと、国際的な日本学会を立ち上げて研鑽を積むアフリカ諸国と、その両者に日系社会も加わって発展したブラジルと。地域に固有の事情を活かし日本研究を発展させてきたことに尊敬の念を持った。

一方、日本における日本学研究組織はこれまで何をやってきたのだろうか。私の研究分野である日本文学に関連する学会に国際学会の要件を備え、国際的格付けを取得している学会はほとんどない。私の知る限りでは東アジアと同時代日本語文学フォーラムのオンライン雑誌『跨境』のみIFを取得している。論文もアカデミックライティングが確立されておらず、縦書き、参考文献欄なし、紙媒体、日本語のみ投稿可。はっきり言えばガラパゴス化している。そこには自国研究であることによる甘えがありはしないか。

なぜ私がこれを記すかという、海外の日本文学研究者に「日本の雑誌でIFを取得している雑誌、英語で投稿できる雑誌はないでしょうか」と何度も聞かれるからである。そして現在、日本の大学院で研鑽を積んでいる留学生たちの帰国後のポストを考えるからである。国内で文系研究領域がポストと資金を奪われつつあると同様、海外の日本学も同じ脅威に晒されている。そのことに対し、想像力を発揮し、連帯しなければならないとひとりで力んでいるのである。

国際化×日本学を旗頭にする組織は世界的なアライアンスを作り、内外問わず日本学の存続発展を志すべきである。大阪大学グローバル日本学教育研究拠点にはその中枢となるポテンシャルがあると感じた。



Connecting Interdisciplinary Communities: Teaching and Research of International Japanese Studies in Japan

Gloria Yu YANG (Lecturer, Kyushu University Faculty of Humanities)

Why do people study Japan in Japan using English?

I get this question often, especially when I mention that I teach modern Japanese art in English at Kyushu University. Interestingly, I received similar questions when I was a PhD student in the US doing dissertation research on Japan fifteen years ago: *If you are studying Japan, why not do so in Japan?*

I have never had a quick, simple answer. Over the past fifteen years, however, the landscape surrounding these questions has changed. Japanese universities have experienced a wave of internationalization (国際化 *kokusai-ka*). Government initiatives have encouraged universities to establish International Japanese Studies programs, hire foreign faculty, conduct international collaborative research projects (国際共同研究 *kokusai kyōdō kenkyū*), and promote the production of scholarly publication and conference presentations in English. As a result, *kokusai-ka* has become an almost cliché, fashionable umbrella term that frequently appears in discussions about the future of higher education in Japan.

The International Master's Program (IMAP) in Japanese Studies at Kyushu University was established in 2011 as a highlight of the university's broader commitment to internationalization. An accompanying International Doctorate (IDOC) was introduced in 2017. A major turning point for the program came in 2018, when the number of faculty members increased significantly. Today, the program includes five non-Japanese, full-time faculty members specializing in Japanese art history, visual culture, literature, religion, and history. Within Kyushu University, the IMAP/IDOC programs are known collectively as *Kōjinbungaku* (広人文学, "the broad study of [Japanese] humanities") and are an integral component of the Faculty of Humanities.

The IMAP/IDOC curriculum is designed to integrate the strengths of graduate education in the US, Japan, and Europe. Its structure follows the model of American (and partially European) graduate programs, including methodology seminars, survey courses, in-

tensive reading workshops, and discussion-driven seminars. The program maintains a notably high faculty-to-student ratio, enabling individualized mentorship and a highly research-oriented environment.

A distinctive component of the IMAP/IDOC curriculum is its one-week in situ fieldwork trip in Japan. Faculty members collaborate in planning and leading the trip, and students contribute ideas for sites related to their individual research. The fieldwork functions as an intensive research seminar—with preparatory discussions, onsite presentations, and the production of follow-up journals and papers—as well as an important bonding experience, as students spend days and nights working and living together. In 2025, the group traveled to the Seto Inland Sea for the Setouchi Triennial 2025 and to Nara for the annual Shōsōin exhibition, engaging in firsthand dialogues with artworks and local communities.

The success of the program owes much to the faculty's shared ideals and collaborative efforts. The five faculty members collaborate with one another, as well as with Japanese colleagues and international scholars. They publish in English, Japanese, and Chinese, and participate actively in both domestic and international research projects, from Kaken grants in Japan to Getty Foundation Initiatives in the United States. The program regularly invites scholars to deliver guest lectures in both English and Japanese. As a result, the IMAP/IDOC student body is a dynamic, diverse community of master's, doctoral, exchange, and research students from around the world. The central hub of the community is the Japanese-style "KKS" (研究室 *kenkyūshitsu*), a room serving as an internal library and common space.

Of course, there are great challenges for IMAP/IDOC as a graduate program in Japanese Studies taught in English. The most immediate is the language barrier: the necessity of the ability to read in Japanese and engage meaningfully with Japanese-language scholarship.

Since IMAP/IDOC does not offer its own Japanese-language courses, students must rely on self-directed study, which becomes a major test of time management and discipline, especially given the standard course load of four to five seminars per semester. I try to incorporate Japanese scholarship whenever possible in my own teaching, but students often struggle to keep pace. Intensive reading in English each week is already demanding; adding a comparable volume of Japanese material can easily become overwhelming.

A deeper challenge lies in understanding Japanese scholarship itself and bringing it into productive dialogue with English-language scholarship. Academic traditions and disciplinary structures in Japan—rooted in shared understandings, theoretical frameworks, scholarly lineage and audiences—have developed differently from those in the US and Europe. For example, scholarly "lineage" and generational knowledge transmitted through enclosed groups and mentorship, such as *kenkyūshitsu*, *kenkyūkai* (研究会), and institutional histories, play a crucial role in shaping the state of the field.

I recognize my students' struggles to balance and bridge these two scholarly worlds because of my similar experiences: I studied Japanese art history in the United States and wrote my doctoral thesis on Japanese colonial architecture, but for my dissertation research in Japan I was affiliated with an architecture department, part of an engineering program (*kōgaku*) grounded in completely different methodologies, focuses, and academic communities. It requires tremendous effort and time to understand and navigate between the Japanese-language and English-language scholarly worlds. As a result, working across them can sometimes feel like standing between two walls—like a stray cat unsure of where it belongs. I find helping students recognize, engage with, and eventually participate in both scholarly communities remains one of the most complex and persistent challenges of this work.

It was an unexpected and inspiring trip to Osaka on a deep winter day. I participated as a discussant at the Seventh Annual Osaka Graduate Conference in Japanese Studies, held at Osaka University's Minoh Campus on January 25, 2025. To my surprise, I felt energized after a full day of listening to presentations by nine graduate students from universities across Japan and discussing their work alongside fellow discussants (Akiyama Kaori, Unoda Shōya, and Nicholas Lambrecht of



the University of Osaka and Felipe Motta of Kyoto University of Foreign Studies) and other attendees. I was deeply impressed by the students' craft of research—their bilingual or even trilingual abilities, their thorough analyses of Japanese primary sources, and their engagement with both Japanese- and English-language scholarship. I was also inspired by the discussants' warm and insightful feedback. The excitement and sense of inspiration lasted long after the one-day conference.

In many ways, this experience spoke to the struggles and difficulties I have encountered in my own path. As the presenters at the conference demonstrated, solid training in Japanese primary materials and academic discourses, combined with an ability to engage with broader scholarly conversations in English, will cultivate a new generation of scholars with balanced, multilingual intellectual mindsets. The discussions also highlighted that interdisciplinary research is a great strength of International Japan Studies, as it fosters new perspectives and broadens the horizons of current scholarship.

Furthermore, what struck me most was how the conference instilled in me a sense of hope that collaborations on International Japanese Studies in Japan among the University of Osaka, Kyushu University, and other institutions will help the field gain further recognition and thus shape its future. Gatherings like this help cultivate a connected community that can make *kokusai-ka* a concrete reality—through conferences, workshops, and inter-university collaboration. This is both exciting and genuinely encouraging.

As I write this essay, I still remember the supportive atmosphere and inspiring discussions at the conference. The two questions asked at the opening still do not have easy answers, but what matters is that in the process of building and developing International Japanese Studies, we share and connect with other scholars who have similar mindsets and visions.

月例ワークショップ

日本研究の最先端の成果を学際的に共有すること、研究ネットワークを国際的に拡大することを目的として、会場でもオンラインでも参加できるハイブリッド形式のGlobal Japanese Studies Research Workshopを、2025年1月から12月にかけて12回開催しました。今年には日本学術振興会の外国人特別研究員、国際日本文化研究センターのJF日文研フェローの若手研究者やアメリカの大学に所属する研究者等にご登壇いただき、学際的・国際的な研究ネットワークの多様化を図りました。さらに、10月には、学生起業家支援にも取り組んでいるEntrepreneurs' Organization（起業家機構）の大阪支部で活躍している本学OBの若手経営者やキャリア教育・産学連携に携わっている本学の先生方にラウンドテーブル・セッションを組んでいただきました。本拠点が今後、人文学に特化した産学連携の取り組みにかかわっていくうえでの、重要な議論と情報交換の場となりました。

6月には、本拠点兼任の渡邊英理先生（人文学研究科教授）の企画により、映画誌や比較文学などの分野で数多くの斬新な著書を発表してこられた四方田犬彦先生を迎えました。オンラインと対面を合わせて100名以上が参加し、熱のこもった議論が行われました。また、本拠点が日本研究の取り組みを学内から公募し、支援している拠点形成プロジェクトの途中経過や最終成果の発表の場を月例ワークショップの一つとして位置づけ、拠点形成プロジェクト主催によるシンポジウムとワークショップを4回開催しました。このような活動から、グローバル日本研究の発信機関としての本拠点の役割と存在感が強まりつつあると言えます。

GJS Research Workshop 2025年1月例会 Book Talk Series

The New Cambridge History of Japan: Vol.2, Early Modern Japan in Asia and the World, c. 1580–1877

日時 2025年1月13日 [月・祝] 14:00–17:30
 会場 大阪大学豊中キャンパス
 全学教育推進機構実験棟1Fサイエンス・commons
 + Zoom（ハイブリッド開催）

参加者 27名
 登壇者

Book Talk
 David L. HOWELL (Robert K. and Dale J. Weary Professor of Japanese History, Harvard University)

Comments
 John Patrick PORTER (Associate Professor, Tokyo University of Foreign Studies)

Pannel
 Sean O'Reilly (国際教養大学)
 津田太郎 (明治大学)
 池田真歩 (東京都立大学)
 鈴木啓峻 (大阪大学)
 John D'Amico (東北大学)



GJS Research Workshop 2025年2月例会

大学院生研究発表会
 Selected Graduate Explorations of Global Japanese Studies

日時 2025年2月7日 [金] 17:00–18:45
 会場 オンライン開催
 参加者 16名
 発表者 ZHANG Wenyu (Renmin University of China)
 “The Reception of Japan's ‘Minponshugi’ Concept in Modern China: An Analysis Based on Four Newspapers from the Late Qing and Early Republican Periods”
 Anastasiia IAKOVLEVA (LMU Munich, Germany)
 “Nicholas of Japan and His Mission at the Turn of the Eras”
 Mehru Susan ABRAHAM (Jawaharlal Nehru University, India)
 “Production of Medially Accented Japanese Words by Indian Learners: A Case Study of Native Malayalam Speakers”
Comments
 UNODA Shoya (Professor, Osaka University)
 Nicholas LAMBRECHT (Associate Professor, Osaka University)
 Facundo GARASINO (Specially Appointed Lecturer, Osaka University)



GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム

Exploring the Christian Culture in Early Modern Japan through the Newly Discovered Toulouse Fragments
 新出資料・トゥールーズ断簡を通して探るキリシタン文化

日時 2025年3月7日 [金] 16:30–19:00
 会場 大阪大学豊中キャンパス
 全学教育推進機構実験棟1Fサイエンス・commons
 DAICEL Studio + Zoom（ハイブリッド開催）

参加者 51名
 登壇者 Emi KISHIMOTO (Osaka University)
 and Jun SHIRAI (Hiroshima University)
 “Agnus Dei no kuriki no shidai: a Japanese adaptation of the Portuguese text *Summario das virtudes da sancta reliquia Agnus Dei*”

Carla TRONU MONTANÉ (Institute of Science Tokyo)
 “Contextualizing the prints on indulgences identified in Toulouse: laity and the rivalry between Jesuits and Mendicants in the early modern Japanese mission”

Haruka NAKANO (Sophia University)
 “The features of definitions in Portuguese written in the fragment 01 of the manuscript of *the Vocabulario da Lingoa de Japam*”

Mari KUROKAWA (JSPS/NINJAL)
 “Methods of corrections in the early Japanese Christian mission press as witnessed by the proofsheets of *Manuale ad Sacramenta Ministranda* in the Toulouse library fragments”

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「キリシタン新出資料の多角的分析：トゥールーズ断簡を中心に」



GJS-ERI拠点形成プロジェクトワークショップ

The First Workshop on Miki Studies

日時 2025年3月21日 [金] 13:00-17:00
会場 大阪大学吹田キャンパス
大学院人間科学研究科東館第106講義室
+ Zoom (ハイブリッド開催)
参加者 35名

プログラム

13:00-16:00 Presentations

Keynote Presentation

KONDO Kazunori (Osaka University Graduate School of Human Sciences)

“The Philosophy of Institutions: From Miki Kiyoshi to Nakamura Yujiro”

NAKAMURA Yoshifumi (Osaka University Graduate School of Human Sciences)

“Event, Encounter, and Rhetoric: On Miki Kiyoshi’s Anthropology”

MATSUGI Takaya (Osaka University Graduate School of Human Sciences)

16:10-17:00 Discussion

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「三木学の国際拠点形成——哲学的人間学の可能性、人類学と協同主義の交錯と広がり」



GJS-ERI拠点形成プロジェクトワークショップ

Digital Humanities × 研究データ管理

日時 2025年3月27日 [金] 17:00-18:30
会場 オンライン開催
参加者 45名

プログラム

開会のあいさつ

「AI等の活用を促進する研究データエコシステム構築事業」
に関して
甲斐尚人 (D3センター)

プロジェクトで作成した教育動画の紹介

吉賀夏子 (人文学研究科)

- 1. 2023年度「人文学研究者必見! 研究データ管理ことはじめ——OUKAで始めるIII F画像の公開と利活用」
2. 2024年度「人文学研究者必見! テキストデータとTEIで描く新たな研究ビジョン」

他の分野での教材開発——エスノグラフィの研究データ管理入門：オープンサイエンス時代のなかで
神崎隼人 (附属図書館)

今後の展開・まとめ

主催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「人文科学分野向け研究データ管理を促進するデジタル・ヒューマニティーズ学習教材開発」
後援：大阪大学附属図書館



GJS Research Workshop 2025年5月例会

Contested Pasts on Screen: War Memory and Visual Media in Japan, China, and Taiwan

日時 2025年5月30日 [金] 17:00-18:30
会場 大阪大学豊中キャンパス
全学教育推進機構実験棟1F
サイエンス・commons
+ Zoom (ハイブリッド開催)

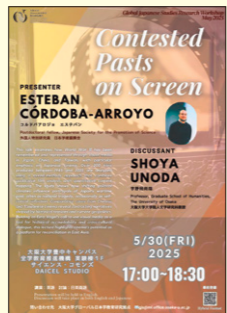
参加者 46名

登壇者 Presenter

Esteban CORDOBA-ARROYO (Postdoctoral Fellow, Japanese Society for the Promotion of Science)

Discussant

UNODA Shoya (Professor, the University of Osaka)



GJS Research Workshop 2025年6月例会

引揚げてではない。強制追放である。

日時 2025年6月19日 [木] 18:00-19:30
会場 大阪大学豊中キャンパス
全学教育推進機構実験棟1F
サイエンス・commons
DAICEL Studio + Zoom (ハイブリッド開催)

参加者 169名

プログラム

開会の挨拶 宇野田尚哉 (大阪大学大学院人文学研究科教授)

司会・進行 渡邊英理 (大阪大学大学院人文学研究科教授)

講演 四方田犬彦 (映画誌・比較文学研究者)

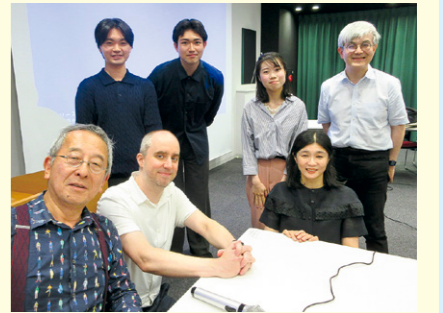
コメント

ニコラス・ランブレクト (大阪大学大学院人文学研究科准教授)

岩本雄伍 (大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻 博士後期課程)

谷水香苗 (大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻 博士前期課程)

萩野聡士 (大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻 博士前期課程)



GJS Research Workshop 2025年7月例会

New Tasks? Policy Reform and Migrant Rights Activism in Japan

日時 2025年7月7日 [月] 17:00-18:30
会場 大阪大学豊中キャンパス
全学教育推進機構実験棟1F
サイエンス・commons
DAICEL Studio + Zoom (ハイブリッド開催)

参加者 28名

登壇者 Presenter

Yunchen TIAN

(JF-Nichibunken Fellow, International Research Center for Japanese Studies)

Discussant

Facundo GARASINO

(Lecturer, The University of Osaka Global Japanese Studies Education and Research Incubator)



共催：国際日本文化研究センター
協力：「国際日本研究」コンソーシアム

GJS Research Workshop 2025年7月例会 (2)

Socialization in the Transitions

日時 2025年7月22日 [火] 17:00-18:30
会場 大阪大学豊中キャンパス
全学教育推進機構実験棟1F
サイエンス・commons
DAICEL Studio + Zoom (ハイブリッド開催)

参加者 31名

登壇者 Presenters

Matthew Burdelski

(Professor, the University of Osaka Graduate School of Humanities)

Joseph Iseri

(Visiting Researcher at the University of Osaka, PhD student in the Department of East Asian Languages and Literatures at the University of Hawai'i at Mānoa)

Discussant

Yusuke Okada (Associate Professor, the University of Osaka Graduate School of Humanities)



GJS-ERI拠点形成プロジェクトシンポジウム

『九鬼周造の人間学：破綻と再建』合評会

日時 2025年8月3日〔日〕13:00-17:00
会場 大阪大学中之島センターセミナー室6A
 +Zoom (ハイブリッド開催)

参加者 33名
登壇者 檜垣立哉 (専修大学文学部哲学科教授、大阪大学名誉教授)
 織田和明 (大阪大学大学院情報科学研究科 特任助教)
 佐藤虎 (専修大学大学院)
 高橋悠 (東京女子大学大学院)
 八杖春樹 (立正大学大学院)



プログラム

- 13:00-13:10 開会挨拶 檜垣立哉 (専修大学)
- 13:10-13:50 著者解題 織田和明 (大阪大学)
- 13:50-14:30 評者 (1) 佐藤虎 (専修大学)
- 14:30-14:40 休憩
- 14:40-15:20 評者 (2) 高橋悠 (東京女子大学)
- 15:20-16:00 評者 (3) 八杖春樹 (立正大学)
- 16:00-16:10 休憩
- 16:10-17:00 総合討議 檜垣・織田・佐藤・高橋・八杖+合評会参加者

共催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクト「三木学の国際拠点形成——哲学的人間学の可能性、人類学と組合主義の交錯と広がり」
 大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター IMPACTオープンプロジェクト 哲学の実験オープンラボ

GJS Research Workshop 2025年9月例会

From Obergefell to Osaka: Comparative Constitutionalism and Judicial Pathways to Marriage Equality in Japan and the United States

日時 2025年9月26日〔金〕17:00-18:30
会場 大阪大学豊中キャンパス
 全学教育推進機構実験棟1F
 サイエンス・commons
 +Zoom (ハイブリッド開催)

参加者 34名
登壇者 **Presenter**
 Brandon Marc Takashi Higa (Attorney & Lecturer in Law, University of Hawai'i at Mānoa)
Discussants
 James Parker (PhD Candidate, University of Hawai'i at Mānoa / Research Scholar, Kyoto University Graduate School of Education)
 TOMIMASU Shiki (Attorney, Tomimasu Law Office)



GJS Research Workshop 2025年10月例会

アントレプレナーシップと人文知

日時 2025年10月21日〔火〕17:00-18:30
会場 大阪大学豊中キャンパス
 全学教育推進機構実験棟1F
 サイエンス・commons
 +Zoom (ハイブリッド開催)

参加者 30名
登壇者 鳥居大嗣 (E0大阪・やまと蜂蜜代表取締役)
 濱田格雄 (大阪大学共創機構 特任准教授)
 家島明彦 (大阪大学キャリアセンター准教授 副センター長)
 松尾哲也 (大阪大学大学院 人文科学研究科 人文学林 准教授)



GJS Research Workshop 2025年6月例会

講演を終えて

岩本雄伍

人文学研究科日本学専攻博士後期課程



1945年9月、大日本帝国の降伏文書調印にともなうアジア・太平洋戦争の終結。平和主義と民主主義に基づいた「戦後〇〇年」は、2025年に80回目を迎えた。近年では日本（人）を中心とした戦後史観が批判的に見直されはじめたこともあり、過去、帝国によって占領・支配された国々に残ってしまった植民地主義や軍事体制の現在の影響に関する言説が積み重ねられてきた。

しかし、その過程で近現代史の枠外に置かれたのが「引揚者」である。なぜ引揚者たちはいわゆる「戦後」になって忘れ去られたのか、そもそもなぜかれらは「外地」に行かなければならなかったのか。これらの問いに回答するには「戦後」を「戦前・戦中」と切り離さず、連続するものとして考えることが欠かせない。映画史や比較文学を中心に批評活動を行う四方田犬彦氏を迎えたワークショップ「引揚げではない。強制追放である。」は、以上の問題意識のもとに進行された。講演に先立って、四方田氏は「言葉を微温的なものに置き換えてはならない」と唱えた。日常的に使われる「終戦」という言葉は日本の植民地支配の歴史を隠蔽するため、戦争の主体的な遂行と降伏を示す「敗戦」に言いかえるべきである。また、日露戦争時に獲得した南満洲鉄道の利権維持のため、不況にあえぐ国内農村地域の村民を開拓移民として入植させたことを「強制連行」、連合軍と日本政府間の戦後処理過程に翻弄された引揚げを「強制追放」と言いなす。強い言葉で帝国の侵略戦争と民間人の動員を批判する四方田氏は、引揚者を描いた映像や文学作品を手がかりに、〈あったはず〉のかれらの「戦後」を追想する。

たとえば羽仁進『彼女と彼』(1963)の主人公・直子は満洲からの引揚げ後、周囲からの異端視(引揚者、とくに女性に対する蔑視)を受けながら東京郊外での団地住まいをはじめ、その隣には当時廃品回収業者が集住した「バタヤ部落」が存在した。「バタヤ」の青年・伊古奈が「(引揚)船で死んだおじさんに似てるわ」という直子の台詞からうかがえるように、団地での日常生活の隙間にも「引揚げ」の傷跡は存在する。しかし、復興が進む戦後社会の部外者として見られた引揚者と国内で差別を受ける労働者層との交流によって、この傷跡は癒やされ、はじめから無かったものとされるが、羽仁が描きかかったのはまさにこの引揚げの忘却と記憶にかかわるポリティクスであったと言えるだろう。

後半部では、GJS-ERI ニコラス・ランブレクト氏に加え、日本の戦後文学を学ぶ大学院生3名(谷水香苗、荻野聡、筆者)からコメントがなされた。歴史学と文学を越境するアプローチのあり方、引揚者をもつ加害者/被害者としてのふたつの側面、戦前/時中から連続する女性の苦難、戦時中は「日本人」だった旧植民地出身者の〈帰還〉問題など、いくつかの重要な問題提起があった。当初の予定時間を大幅に超えた刺激的な講演であったため十分な議論はかなわなかったが、保守的な言論がはびこる今だからこそ、多くの参加者とともに「引揚げ」を植民地主義の延長に見返す、実りある会となった。



第7回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies

日本研究に従事する大学院生の国際発信力の強化と分野横断的な研究交流を目的として、2025年1月25日(土)に、第7回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studiesを「国際日本研究」コンソーシアムとの共催で開催しました。主催組織以外からは、講師として楊昱先生(九州大学人文科学研究院講師)、フェリッペ・モッタ先生(京都外国語大学講師)が参加してください、9名の大学院生が研究発表を行いました。

日時：2025年1月25日[土]
 会場：大阪大学箕面キャンパス外国学研究講義棟2階 学術交流室
 共催：大阪大学グローバル日本学教育研究拠点 「国際日本研究」コンソーシアム

Time	Speaker
9:00-9:10	Opening Remarks (UNODA Shōya and Nicholas LAMBRECHT, Osaka University)
9:10-9:20	Introductions of Panelists and Commentators
9:20-11:05	PANEL #1
9:20	The Takarazuka Revue and the Rise of the Trade Promotion Movement During Japan's Period of High Economic Growth (JIN Yunling, Osaka University)
9:55	Japanese Female Students' University Selection Process and Future Employment (Kazi Humayra RASHID, Ritsumeikan University)
10:30	Cross-Border Dialogues on Womanhood: <i>Chinese Osaka Daily</i> and Transcultural Gender Ideals in Wartime Sino-Japanese Contexts (WONG Hui Yan, Kyoto University)
11:05-12:05	Lunch Break
12:05-13:50	PANEL #2
12:05	From Poetry Contests to Linguistic Wrestling: Reading the <i>Chōshō ni-nen sumōdate shiika-awase</i> (Axel MICHEL, École Pratique des Hautes Études / Waseda University)
12:40	Rival Claims on Korea in Early Modern Japanese and Manchu Historiography (Norman TIETZ, Kyushu University)
13:15	Hoshina Kōichi's Linguistic Nationalism: The Influence of German Linguistic Purism in 1920s Japan (HATTORI Kazuhiro, Nagoya University)
13:50-14:05	Short Break
14:05-15:50	PANEL #3
14:05	Disability, Eugenics, and Reproductive Narratives in Japanese Women's Literature of the 1920s and 1930s (Beatriz MOREIRA, Nagoya University)
14:40	The Imagery and Symbolism of Disease in the Mori Ōgai Short Story "Shokudō" (Burcu ALACAKLIOGLU, Osaka University)
15:15	An I for a We, A We for an I: The (Un)Translatibility of the "Pronoun Drama" in Dazai Osamu's Works (Sarah SHERWEEDY, Tokyo University of Foreign Studies)
15:50-16:05	Short Break
16:05-16:55	General Discussion (Gloria Yu YANG, Kyushu University; AKIYAMA Kaori, Osaka University; Felipe MOTTA, Kyoto University of Foreign Studies; Alessandra SOLIMENE, Sophia University; and the conference organizers)



発表者の声

Osaka Graduate Conferenceは、多様な文化的・言語的背景を持つ参加者が、英語を共通言語として議論する場です。最大の収穫は、「日本」を「外から」捉える視点を得たことです。これまで私は「日本語」で「日本」を研究することを自明としてきましたが、発表を通じてこうしたナショナルな枠組みを考え直すことができました。苦労したのは、日本語で行ってきた研究をそのまま英訳してもうまく伝わらないことです。英語で発表することは単なる翻訳ではなく、より普遍的な文脈に自身の研究を位置づけ直す作業だと実感しました。先生方からは、発表の内容についてだけでなく、英語での発表をより効果的にするための具体的な助言もいただきました。また、他の発表を通じて、文学・歴史・社会など多様な領域の知見に触れ、大きな刺激を受けました。英語力が心配な方も、ぜひチャレンジしてみてください。コメントーターの先生方、発表者の皆さん、どうもありがとうございました！



パンフレット

オブザーバーの声

今回のOsaka Graduate Conference in Japanese Studiesを傍聴し、英語での発表の仕方を学ぶことができました。日本で研究生活を送っていると、英語を使う機会が少なく、国際学会の場でいきなり英語で発表することになると、緊張してしまう場合も多いため、今回の傍聴は、国際学会での発表の仕方に慣れる良い機会となりました。また、先生方は発表者に対して、専門的な意見だけでなく、スライドの作り方や質疑応答の際の対応についてもアドバイスをされていました。この傍聴を通じて、どのように学術的な知見を分かりやすく聞き手に伝えるかについて、多くの気づきを得ることができました。さらに、異なる分野の発表を聞くことができたのも貴重な経験でした。今回は、芸術学、文学、歴史学、言語学など、さまざまな分野の発表がありました。特に歴史学の発表は、自分の研究とは全く異なる内容でしたが、非常に興味深く、有意義な時間を過ごせたと感じています。このConferenceは、発表者だけでなく、傍聴者にとっても大変貴重な経験であり、来年の開催も心より楽しみにしています。

この度初めてOsaka Graduate Conference in Japanese Studiesに参加し、英語での発表だけでなく、学術発表そのものの経験がまだ少ない若手研究者にとって非常に貴重な機会だと思いました。さまざまな分野の先生方から、発表者それぞれの研究内容や発表の工夫について丁寧なフィードバックをいただけることは、ほかの学術発表会ではなかなか得られない経験だと思います。また、日本各地の大学で活躍している発表者同士で直接コミュニケーションをとり、意見交換ができるため、今後の研究活動におけるネットワークを築く上でも、Osaka Graduate Conference in Japanese Studiesは重要な場だと強く感じています。



サンパウロ大学 (USP) における 集中講義と日本研究をめぐる学術交流

岸本恵実

(大阪大学大学院人文学研究科教授)

筆者は本学人文学研究科日文学専攻に所属し、日文学・日本語史を専門として、日本語の歴史的研究に従事している。2025年8月上旬から9月下旬にかけての約1か月半、ブラジルのサンパウロ大学 (Universidade de São Paulo, 以下 USP) の日本語・日文学・日本文化大学院プログラムにおいて、16～17世紀日本のカトリック宣教のために作成された、いわゆるキリシタン文献を主題とする集中講義を担当する機会を得た。

筆者はブラジル研究や同国の社会状況について十分な知識を有しているとは言い難く、認識の誤りがあることを恐れるが、今回の滞在を通して実際に体験し、感じたことを伝える貴重な機会を与えられたと考えている。本稿では時系列に従い、(1) USPでの集中講義 (8～9月・サンパウロ)、(2) アマゾナス連邦大学での学会参加 (9月・マナウス)、帰国後の (3) 国際シンポジウム参加 (12月・大阪) および今後の展望、の三点を報告したい。

(1) USPでの集中講義 (8～9月・サンパウロ)

USP 哲学・文学・人間科学部東洋文学学科の日本語専攻は1963年に設立された歴史ある専攻であり、それとは別に、1968年に研究機関として日本文化研究所が設立された。2026年に30周年を迎える日本語・日文学・日本文化大学院プログラム (修士課程) は、ラテンアメリカにおいて唯一、日本研究に特化した大学院プログラムである。こうした歴史的経緯と現在の研究体制の両面から、USPは現在、ラテンアメリカ最大の日本語日文学教育および日本研究の拠点機関である。

同大学では1969年以降、ほぼ毎年日本から客員教授を迎えており、筆者は実に61人目にあたるこのことである。受入担当のエリザ・アツコ・タシロ准教授はUSPの修了

生であり、在学中に日本のキリシタン文献を紹介されたことを契機として、現代日本語研究と並行して歴史的研究にも取り組んでこられた研究者である。筆者とは2004年にUSPで開催された国際宣教言語学会 (International Conference on Missionary Linguistics) 以来交流があり、2018年リオ・デ・ジャネイロで発見されたキリシタン版『日葡辞書』の調査を通じて再びご縁が深まり、今回、国際交流基金およびUSPの助成を得て招聘いただく運びとなった。タシロ准教授とともに、ワタル・キクチ准教授 (日本文化研究所所長) も、サンパウロに不案内な筆者をいつも温かく支えてくださった。日本語専攻の先生方はお一人お一人、USPのみならずラテンアメリカの日文学を支える担い手としての責任感のもと、学内外の多くの業務に精力的に取り組んでおられ、その熱意と献身ぶりには頭の下がる思いであった。

ブラジルとキリシタン文献がどのように関連しているかという点、1549年にイエズス会士フランシスコ・ザビエルが来日したのとはほぼ同時期、ブラジルにもイエズス会宣教師が到着し、宣教活動を開始している。その後の歴史的展開は日本とブラジルとで大きく異なることになっ



サンパウロのセー (カテドラル) 前にて

たものの、ヨーロッパでラテン語とカトリック教義を学んだ宣教師たちが、宣教地の言語・文化を理解し、ポルトガル語やラテン語を用いて教義を説いた点においては共通している。日本とブラジルは近代の移民以前、直接的な人的交流があったわけではないが、宣教を通じたつながりがあったのである。



USPでのハイブリッド式公開講義

USPでの講義は原則として週二回、日本語からポルトガル語への逐次通訳付きで行われ、大学院生・特別聴講の学部生が毎回出席したほか、公開講義としても複数回開催された。講義では大きく三種の文献を扱った。すなわち、①当時の日本の話し言葉で書かれたキリシタン文献である『天草版平家物語』『天草版伊曾保物語』、②同じくキリシタン文献の語学書『日本大文典』『日葡辞書』、③キリシタン文献の影響を受けて執筆された「奉教人の死」などの芥川龍之介の小説である。「奉教人の死」の講義では、USPのマダレナ・ハシモト・コルダロ元教授とジュンコ・オオタ准教授によるポルトガル語訳を参照させていただいた。

学生たちは、これらの文献に用いられている日本語が古典語とも現代語とも異なる点に強い関心を示し、また日本語のアルファベット表記など、ポルトガルの言語・文化の影響を色濃く受けて成立した点に大きな興味を抱いたようであった。筆者自身も、日本語・日文学および日本文化以外の分野に広い知識を持つ、知的好奇心旺盛な学生たちの質問やコメントから多くを学ぶことができた。

(2) アマゾナス連邦大学での学会参加 (9月・マナウス)

9月10日から12日にかけてはブラジル北部に位置するアマゾナス州の州都マナウスに移動し、アマゾナス連邦大学で開催された第28回全ブラジル日本語・日文学・日本文化大学教師学会および第15回ブラジル日本研究国際学会 (XXVIII Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa e XV Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil) に参加した。大会委員長のホドリゴ・ヨシユキ・タナカ准教授 (パウリスタ州立大学) のお声がけにより、白井純教授 (広島大学) と三人でキリシタン文献を対象とした言語学史パネルにおいて、筆者は「トゥールーズ図書館所蔵の日葡辞書稿本について」と題する発表を行った。本発表は、日本学拠点形成プロジェクトの成果の一つでもある。

本学会は、ブラジル国内の日本研究者に加え、国外で日本に関する研究を行う研究者が一堂に会する二年に一度の貴重な場である。筆者は大会全体の特徴を総括できる立場にはないが、移民研究や俳句研究といった既存分

野においても新たな視点や方法論が導入されていたこと、各分野で大学院生と若手研究者が意欲的に発表していたことは、特筆すべき点であろう。

9月13日には、同学会に参加していたファクンド・ガラシーノ本拠点特任講師とともに、「日本留学フェア in 西部アマゾン日伯協会」に参加した。本フェアは、文部科学省「日本留学促進のための海外ネットワーク機能強化事業 (南米地域)」の一環として筑波大学の主催により開催されたもので、日本からは大阪大学を含む8大学・4機関が現地にて参加し、約400名の高校生・大学生・大学院生が来場した。大学・機関の個別ブースには途切れることなく来場者が訪れ、マナウスにおいても日本留学を希望する若者が少なくないことを実感する機会となった。

(3) 国際シンポジウム参加 (12月・大阪) と今後の展望

12月13日、本学において開催された国際シンポジウム「Globalizing Japanese Studies in the Age of the Rising Global South」にて、USPでもお世話になったレイコ・マツバラ・モラレス准教授が「ブラジルの日本研究動向——サンパウロ大学を中心に」と題する講演が行われた。講演では、筆者が8～9月の滞在中に体感していた事柄が、ブラジルおよび世界における日本研究の動向という視点から、俯瞰的かつ数量的に示され、本稿をまとめるにあたって大いに参考とさせていただいた。

講演を拝聴してとりわけ強く感じたのは、ブラジルには日本研究への関心が高く、実際に日本語や日本文化を学ぶ人々が少なくない一方で、さらに高度な学びへと進もうとする人々を受け入れる体制が、ブラジル内の高等教育機関においてまだ十分に整備されているとは言い難いという点であった。大阪大学では2009年、USPと大学間協定を締結しているものの、人文学分野における学生交流、とくに大学院レベルの受入については必ずしも活発ではなかった。現在、学生および研究者の受入・派遣を制度的に支え、円滑に促進することを目的として、本拠点を含む部局間協定の締結に向けた取り組みを進めているところである。

最後に、招聘に際して種々の手続きを担い、滞在中も終始こまやかにご配慮くださったタシロ先生とキクチ先生、本学シンポジウムでもお世話になったマツバラ先生をはじめとするUSPの諸先生方に、深く感謝申し上げます。また、講義に熱心に参加してくれた学生たちにも心より御礼を申し上げたい。さらに、都合により全回の講義を担当できなかった筆者の代講を引き受けてくださり、マナウスでの学会にお招きくださったタナカ先生に、ここに記して深く感謝の意を表する。

今年の活動を振り返って

本拠点の運営委員の方々に、今年の活動について振り返っていただきました。



宇野田 尚哉（副拠点長／グローバル拠点形成部門長／デジタル日本学部門長／人文学研究科教授）

本拠点は、「日本」を手掛かりとした人文・社会科学の最先端の研究が展開される学際的・国際的学術プラットフォームを構築するとともに、そのような研究成果を学際的・社会学連携的な教育プログラムとして展開することを目指してきました。2025年は、これらの事業を着実に展開した一年でした。今年には海外の大学と学術交流協定を締結したほか、ナイジェリア、エジプトとブラジルで日本研究において中心的な役割を果たしてきた先生方をお招きした国際シンポジウムを開催することができました。学術交流協定の実現に多大なご協力を賜ったメキシコ大学院大学やナポリ東洋大学の関係者の皆様、そしてご遠路とご多忙のところわざわざお越しくくださったイバダン大学、カイロ大学、サンパウロ大学の先生方に改めて心より感謝申し上げます。また、本拠点初の高大連携の試みとして高校生のための講座を開き、本学の研究成果の一端を次世代を担う若い人々にお伝えすることができました。ご応募・ご参加くださった皆様、並びにご講演くださった先生方にお礼申し上げます。来年も日本研究をめぐる国際連携、そして人文社会科学分野における地域連携・高大連携事業を一層充実させていきます。今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



岩井茂樹（副拠点長／グローバル人材育成部門長／ネットワーク形成管理部門長／日本語日本文化教育センター教授）

本拠点では、グローバル人材育成のため、Japanese Studiesを基盤とした学際的・社会学連携的教育プログラムの構築とその全学展開を図っております。これに加え本年度は、社会、特に次世代を担う高校生との連携強化を図るため、9月に「高校生のための大阪大学人文・社会科学系講義」というイベントを行いました。本イベントは高い関心を集め、予想を超える応募があり、イベント当日には約40名の高校生が積極的にイベントに参加してくれました。来年度も引き続きこのようなイベントや種々のセミナーなどを引き続き行い、本拠点の社会学連携体制や高大連携体制の強化に努めたいと考えています。また、個人的なことではありますが、本年9月に『歌銘茶道具の世界』（新典社）という本を出版することができました。これも本拠点の様々な取り組みの中で得られた成果や刺激が結実したものであります。今後のグローバル拠点の動向に関心を持っていただけるとありがたく存じます。



小野博司（グローバル拠点形成部門／高等司法研究科教授）

グローバル日本学教育研究拠点の運営委員は2年目となります。今年は、昨年、拠点形成プロジェクトに採用していただいたテーマ（「明治期における伝統日本法紹介の試み——日独法学者による『令義解』独訳計画」）を大いに進展させて、19世紀後半から20世紀初頭のヨーロッパにおける日本法研究の歩みを明らかにしていくつもりで自分自身とても楽しみにしていたのですが、思いがけず所属部局で重たい業務を引き受けることになり、また、他のメンバーも同様に多忙で、残念ながら予定通りには研究を行うことができませんでした。それでも、新たなメンバーを迎え、資料調査（青森、パリ、千葉）や資料整理（「津軽英麿日記」）も少しずつですが進めていきました。来年には、最初の成果を公表できそうです。せっかくいただいたチャンスですので、是非おもしろい成果を発表したいと考えています。



ばんざわ
鳩澤 歩（グローバル拠点形成部門／経済学研究科教授）

2025年も、本拠点の運営委員としての活動は諸般の事情で貢献薄く申し訳ありませんが、昨年度から先導的学際研究機構（OTRI）のグローバルヒストリー部門の活動に本格的に参加し、定期的なグローバルヒストリー・セミナーや外国からの研究者招聘などで、主幹的な役割を担う経済学研究科・経済史系に属する同僚教員のサポートにあたっています。日本史についてもグローバルな視野でとらえる必要のいつそうの高まりをそこでも感じておりますが、制度的な支障や制限はあるものの、こちらとの連携も模索していきたいと考えております。私の専門分野でも、かつて一国レベルで完結していた鉄道史研究もよりグローバルな連関でとらえられるようになっており、研究活動も国際的な連関がさらに常態化しております。個人的にも25年度中には日独比較鉄道史について、邦文論文の他に2本の中国語論文を公刊する機会を得ました。



渡邊英理（グローバル拠点形成部門／人文学研究科教授）

今夏、単著『到来する女たち——石牟礼道子・中村きい子・森崎和江の思想文学』（書肆侃侃房）を刊行しました。「戦後日本」のフェミニズムの画期は、第二波フェミニズムにあると見なされています。しかし、それ以前にも「女」の思想はあり、九州山口のサークル交流誌『サークル村』に参加経験を持つ、石牟礼・森崎・中村らの「思想文学」はそのひとつ。三人は相互に交流・接触し、摩擦から抵抗を生み出し、同時に互いに他をケアしあう個と集団の思想を模索しました。三人の思想はグローバルな現代社会を、非人間たちをも含む不透明な他者とともに生きる惑星的な構えを教えてください。『到来する女たち』はそれを伝えたい思いから記し、森崎和江『能登早春紀行』（中公文庫）、『海路残照』（インスクリプト）にも、同様の気持ちで解説を寄せました。三人の言葉の中にある脱性差別的で脱種差別的な思考のあり方は、「国際化」に必須のものだと思っています。



南 和志（グローバル拠点形成部門／国際公共政策研究科准教授）

グローバル日本学教育研究拠点の運営委員は3年目となります。世界中で人文学のプログラムが縮小される中、グローバル日本学は日本と世界の人文学をつなぐ架け橋になる可能性を秘めており、これからも微力ながら貢献できればと思っています。私は東アジアの国際関係史が専門で、現在は日本を含む東アジアのエネルギーに関する政治、経済、外交を研究しております。今後はこれまで以上に日本研究に励みたいと思っています。



Nicholas LAMBRECHT（グローバル拠点形成部門／人文学研究科准教授）

2025年には、月一回以上のペースで行われたグローバル日本学教育研究拠点の月例ワークショップを通じて、拠点の幅広い活動に刺激を得ました。なかでも特に印象に残っているのは、私がディスカッサントを務めさせていただいた6月例会の「引揚げではない。強制追放である」と、2月例会の「Selected Graduate Explorations of Global Japanese Studies」です。また、例年どおりOsaka Graduate Conference in Japanese Studiesが1月に実施され、参加者が早稲田大学、東京外国語大学、名古屋大学、九州大学、上智大学など遠方な大学からはるばる箕面キャンパスに集まり、各発表について活発な議論が交わされました。さらに、本拠点の国内外の連携強化の一環として、東北大学で開かれたThe International Interdisciplinary Japan Studies Graduate Workshopを宇野田副拠点長と本学の学生2人と共に訪問し、来年の大阪大学での開催に向けて調整を行いました。イベント以外では、大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の科目を6つ担当させていただきました。微力ではありますが、今後も拠点に貢献できるよう努めていきたいと思っています。



村上靖彦（グローバル人材育成部門／人間科学研究科教授）

本年度日本学教育研究拠点のメンバーとなりました。貢献はまだできておりませんがこれからどうぞよろしくお願ひいたします。私自身はもともとはフランスの現象学を中心とした哲学の研究者でしたが、20年以上医療福祉現場でのフィールドワークを重ねております。今年には介護職に取材した『鍵をあげはなつ』（中央法規出版）とケアに潜む暴力を論じた『傷つきやすさと傷つけやすさ』（KADOKAWA）という書物を出版しました。現在はとくに北海道医療大学と浦河べてるの家のみなさんとともに札幌刑務所において受刑者・刑務官のみなさんと当事者研究を重ねております。本年6月に懲役刑が拘禁刑へとかわり、刑務所が大きく変わりつつあります。そんななかで懲罰から更生・ケアへと変化していく司法の世界をみつめております。

年間活動記録

2025年1月～2025年12月

2025年 1月	GJS Research Workshop Book Talk Series 「The New Cambridge History of Japan: Vol.2, Early Modern Japan in Asia and the World, c. 1580-1877」開催 第7回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies開催 人文社会科学系オナー大学院プログラム「グローバル日本学」ユニット募集説明会の開催
2025年 2月	文部科学省委託事業「人文学・社会科学のDX化に向けた研究開発推進事業」DHコンソーシアムプロジェクト 人材育成セミナー「人文学のためのテキストデータ構築入門」開催（共催） GJS Research Workshop 「Selected Graduate Explorations of Global Japanese Studies」開催 日本文化紹介講座「日本美術史の謎－笑顔写真誕生物語」開催（協力）
2025年 3月	GJS-ERI 拠点形成プロジェクトシンポジウム「Exploring the Christian Culture in Early Modern Japan through the Newly Discovered Toulouse Fragments」開催／GJS-ERI 拠点形成プロジェクトワークショップ「The First Workshop on Miki Studies」開催 GJS-ERI 拠点形成プロジェクトワークショップ「Digital Humanities×研究データ管理」開催 第13回大阪大学日本語・日本文化国際フォーラム「中国における日本語・日本文化教育の現場から」開催（共催）
2025年 4月	大学院高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」に関する説明会の開催
2025年 5月	2025年度グローバル日本学教育研究拠点「拠点形成プロジェクト」募集開始 GJS Research Workshop 「Contested Pasts on Screen: War Memory and Visual Media in Japan, China, and Taiwan」開催 第2回 No Border Fest in Minoh 開催（協力）
2025年 6月	GJS Research Workshop 「引揚げではない。強制追放である。」開催
2025年 7月	GJS Research Workshop 「New Tasks? Policy Reform and Migrant Rights Activism in Japan」開催 GJS Research Workshop 「Socialization in the Transitions」開催 メキシコ大学院大学アジア・アフリカ研究センターと部局間学術交流協定を締結／ナポリ東洋大学と部局間学術交流協定を締結 ワルシャワ大学東洋学部のスタレツカ・カタジナ准教授が来訪
2025年 8月	GJS-ERI 拠点形成プロジェクトワークショップ「『九鬼周造の人間学：破綻と再建』合評会」開催 【DiHuCoワークショップ】「デジタルヒューマニティーズのためのアーカイブ基盤を学ぶ」開催（共催）
2025年 9月	カイロ大学文学部日本語・日本文学科のアブデルラフマーン専任講師との懇談会 高大連携事業「高校生のための大阪大学 人文・社会科学系講座」開催 上海交通大学外国語学院日本語学科長の金文峰教授、及び本学東アジア拠点長の麻寧緒教授がご来訪 GJS Research Workshop 「From Obergefell to Osaka: Comparative Constitutionalism and Judicial Pathways to Marriage Equality in Japan and the United States」開催
2025年 10月	GJS Research Workshop 「アントレプレナーシップと人文知」開催 第8回 Osaka Graduate Conference in Japanese Studies の研究発表募集開始（2026年1月開催）
2025年 11月	2026年度4月開始 人文社会科学系オナー大学院プログラム「グローバル日本学ユニット」履修生募集開始
2025年 12月	第10回 大阪大学豊中地区研究交流会にてポスター発表／国際シンポジウム「Globalizing Japanese Studies in the Age of the Rising Global South」開催

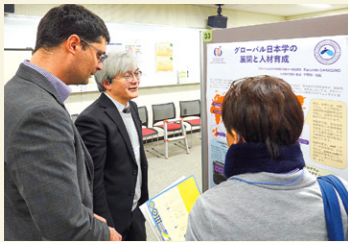
参加報告

第10回大阪大学豊中地区研究交流会

グローバル日本学の展開と人材育成

ファクンド・ガラシーノ

大阪大学グローバル日本学教育研究拠点
特任講師



2025年12月5日（金）、大阪大学豊中キャンパスにて、第10回大阪大学豊中地区研究交流会「知の共創」が開催されました。豊中キャンパスに本拠を置く教員と大学院生などが互いの研究や取り組みを理解し、文理の垣根を越えた交流を深めることを目的として、ポスター発表会と情報交流会が行われました。自治体や企業関係者による発表もあり、市民の方々が多く訪れました。

本拠点では、「グローバル日本学の展開と人材育成」をテーマにポスター発表を行い、本拠点の提供している教育プログラムとそれと連動した学術イベントの成果を紹介しました。周知のとおり近年では「国際日本研究」コンソーシアムの活発化からも見られるように、日本研究の国際連携が飛躍的に強まっています。そこで今年の研究交流会においては、本拠点がグローバル・アカデミアで活躍できる日本研究人材の育成に注力してきた経験を共有しました。とりわけ、本レポートでも報告している高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」と人文社会科学系オナー大学院プログラム「グローバル日本学ユニット」での教育事業について発表しました。さらに、これらのプログラムでの学びの成果を実践し、学際的・国際的な研究発信力の強化を図るための事業についても触れました。

各部局で国際連携にかかわっている方々と交流しつつ、学内外の多くの参加者に本拠点の人材育成事業についてお伝えできたことが、豊中地区研究交流会での貴重な成果となりました。日本研究をめぐる状況が変化しつつあるなかで学際的・国際的に活躍できる人材を育成するという、本拠点に期待されている使命を果たすべく、学内外のパートナーとの連携をさらに強化していく所存です。

構成員一覧

拠点長	
宮本陽一 MIYAMOTO Yoichi	理事・副学長
グローバル拠点形成部門	
宇野田 尚哉 UNODA Shoya	副拠点長 グローバル拠点形成部門長・運営委員 人文学研究科 教授
小野博司 ONO Hiroshi	運営委員 高等司法研究科 教授
鳩澤 歩 BANZAWA Ayumu	運営委員 経済学研究科 教授
渡邊英理 WATANABE Eri	運営委員 人文学研究科 教授
南 和志 MINAMI Kazushi	運営委員 国際公共政策研究科 准教授
ランブレクト ニコラス LAMBRECHT, Nicholas	運営委員 人文学研究科 准教授
宮原 暁 MIYAHARA Gyo	人文学研究科 教授
三好恵真子 MIYOSHI Emako	人間科学研究科 教授
山崎吾郎 YAMAZAKI Goro	COデザインセンター 教授
近藤和敬 KONDO Kazunori	人間科学研究科 准教授
安岡健一 YASUOKA Kenichi	人文学研究科 准教授
ガデミ アミン GHADIMI, Amin	人文学研究科 准教授
ガラシーノ ファクンド GARASINO, Facundo	グローバル日本学教育研究拠点 特任講師
吉成哲平 YOSHINARI Teppei	人間科学研究科特任助教

デジタル日本学部門

宇野田 尚哉 UNODA Shoya	副拠点長・デジタル日本学部門長 運営委員 人文学研究科 教授
田畑智司 TABATA Tomoji	人文学研究科 教授
吉賀夏子 YOSHIGA Natsuko	人文学研究科 准教授
菅原裕輝 SUGAWARA Yuki	人文学研究科 講師

グローバル人材育成部門

岩井茂樹 Iwai Shigeki	副拠点長 グローバル人材育成部門長・運営委員 日本語日本文化教育センター 教授
村上靖彦 MURAKAMI Yasuhiko	運営委員 人間科学研究科 教授
岡部美香 OKABE Mika	人間科学研究科 教授
櫻井千穂 SAKURAI Chiho	人文学研究科 准教授
永原順子 NAGAHARA Junko	人文学研究科 教授
松村薫子 MATSUMURA Kaoruko	日本語日本文化教育センター 准教授
松岡里奈 MATSUOKA Rina	日本語日本文化教育センター 特任講師

ネットワーク形成管理部門

岩井茂樹 Iwai Shigeki	副拠点長 ネットワーク形成管理部門長・運営委員 日本語日本文化教育センター 教授
岸本恵実 KISHIMOTO Emi	人文学研究科 教授
筒井佐代 TSUTSUI Sayo	人文学研究科 教授
藤平愛美 FUJIHIRA Manami	日本語日本文化教育センター 准教授
松浦幸祐 MATSUURA Kosuke	日本語日本文化教育センター 助教

編集後記

2025年の年次報告書をお届けいたします。今年度も、拠点形成プロジェクト、国際シンポジウム、月例ワークショップ、大学院生発表会などの報告を掲載することができました。特に、国際シンポジウムは、今後連携を深めたい南アメリカ大陸の研究者などと活発な議論を行いました。また今年度より社会学連携・高大連携・地域連携をより緊密に行なっていくためのイベントを行い、そのご報告もできました。このような取り組みを加速させ、本拠点が目指す「グローバル日本学」の形成に繋げていきたいと考えているところです。

(岩井)

グローバル日本学教育研究拠点に関わってから2年目になります。今年は高大連携・産学連携の取り組みやアフリカの研究者を登壇者に迎えた国際シンポジウムの開催といった、本拠点として初めての試みを実施し、飛躍の一年となりました。また、月例ワークショップでは、個別の拠点形成プロジェクトから派生した複数の企画が実施され、さらに学外や海外からの多彩な研究者をお招きしました。今年の年次報告書の中から、本拠点が使命とする「グローバル日本学」の充実化と新たな方向へのさらなる展開を確認いただければ幸いです。

(ガラシーノ)



大阪大学グローバル日本学教育研究拠点のロゴについて

様々な「知」が集まり新たなものが生まれ発展していく様子を、複数の羽を持った鳥の姿で表現したデザイン。「襲（かさね）の色目」を取り入れ、多様性を表現している。

発行者＝大阪大学グローバル日本学教育研究拠点

<https://www.gjs.osaka-u.ac.jp>

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 日本学棟101

TEL 06-6850-6394

gjs@ml.office.osaka-u.ac.jp

発行日＝2026年3月31日



The University of Osaka
Global Japanese Studies
Education and Research Incubator

